郎路生麻◆幹主

### 连旗伊侧

號月七



昭和二二年七月一日張行(毎月一周一日研行)

川柳雜誌

節 第五卷 第

川柳雜誌社發行

#### 月 例

B 場 時 所 心者の來會を大いに歡迎す 三十錢 七月六 の辻東入 日本橋俱樂部南區日本橋一丁目交叉點北 日午後七時

#### 中 見舞 告を募る

柳友交遣のため左の便法を設く。 0 ▽ 奮つて申込まれたし 金五拾 Δ

簡單に願います。 簡単に願います。 一門希望の方 の方 〇申込期限 七月十日迄 《八月歌》

> 高 -月

句

務所 大阪市住吉區杭全町六〇三 川柳雜誌 社

砂本

紋五

太葉

廣告御申込は成るべく振替が御利用の 代用でも差支へありません) 上「前金」に願ひます。(三錢以下の切手 振替大阪七五〇五〇番

各川本柳社

家戶月 柳籍例

> 安橋庄太相淺 本萬田元井

は朝子と朝子

近

家

### .

漱石さんの「坊ちやん」長半女餞君に與ふ三三 究·其 野好生

古句質疑・世代五) まで(一〇)麻 川松路蛭柴瓶椙 舟山紋省 角郎 紋 路 省 兩 大樓太二 恭評太 郎 二

朝中水中水安楊 內好本井

作 K 田見田川谷西井 眼 新光黃陽鮎杏二◇ 多革素 樽 水路彩子美三南 島中松中兼桑 長 諸 田澤丘島重原 崎

> 翠濁町鐵白京 柳 峯水二洲 鷗郎 秀

(表紙)金魚掬ひ ひ塔創 3 聞郎人し 作 橋松川橫 革小吉 出田 琴舟眠 ょ 子人々聲

生重し

目



醉さ見豫待雨捨蚊嬉英簡死 人病滿何ぢ はふくじつ晴子帳ん語單の れので させつめこても中下ななま際のしを死て れてて聞きこうかさご心ざ君此てバぬを た戴るい久階幸らい喋臟 其きたてし貨福もミ はみり判ば 夜まがる機しなみ香れ癖と悼 墳なにら可 をす此ま闘ま日ぞ具ぬ痺君み墓へ患な笑 悔こ方す車すがれ師質がもての夕者いし いものとが張あの賣にう見 すべ撮のな てた落任一りる仲り生らせらぐ淋つにこ 娘れ度せつ替ば間つれやてりとして戀こ 死込なる過えか入けつまく なみるの思 にみり氣ぎるりりるきれれ りぬる夢ふ

同同同志同同同同同简同同 同同同同寂

近作柳

郎楢

選

路



幸戀氣轉學盆着叱水雲春い金同肢爪戀戀所煎逢此母妻 福人まり核栽馴言引を風つ故じしき愛人髮斃ひ處病に のがづやへのれいで追のまに血さつ線でににしもんな 扉かきああ話なふ縛ふ便であがにてはう 後鬢 夜春でる のほ朝んかでい事の煙りもご此心そつ言きかの墓一心 でなるのはでいる。 前うの氣で金着なでりはとまったりう來き後一かあ に見味分内はて、目のなるま に見味分内はてく見の父〉に置くあかるあめばごつたへ噌に氣借物層せ後もでく 通場のた手のて氣にり泣 \*セ 汁 ぜ能らよ、るを少廻な恐ち 類奴を恐坐も日るい すルの成くすくか心追しふるろこりがあろり針が女で んのいれ分に當せなふ解水暮し狂な死ぶし替住當の吳 で頃ろぬり來りるり心け車しさひさにりくへ事り子れ

同同大同同同局同同同同同同同同同日同同日

阪 F

同同多同同同聽同同同雅同同同重同同同恩同司同伴同

陽 喜

阪

取

阪

女

子 F. 內 松 网络



企盥 正 引父位人人讃父舞も蛙人種 押末四僕熱人 業家か し 越親牌間様ん上踏う落間馬青への + ばが妻の 立く友 の 立く及 の の でに 會睡 ちのの森 てのに り 去のなり や月間きのに正つ死慧字お斯いて空精積も為近怒り吸 死病直頭なをの民う時渦虚液馬押めくる又ひ へに にね借如をい分卷 晉 れ題日ある響過はばらく向ふにくをが傷てご貯住俗込 ず目にせり指ぎあ食ね吾け風母水木飛ら長金の物む り 圖でまへばがてにはののぶり櫻女に氣にや K E 出 こし す りぬな妻コ擁しか芽 殴し 來な \* 友 る 儲白人 6 愚 ンくて が 突 春 きか 焦 が 歸 な = 1 るへ は ばか過もぬかパのしやく風 まらり知つ美 のた 死 からぎあ後なりなまきや しれ出れてしみり に りずるり家りトりいしうや たるしずるさ

別同 同 人同同同 鞍同同同大同同同 青同同同尼同 阪 Ш 阪 崎 晃同 同 桃同同同草同同同梢同同同 猪同同同木同 牙 平

卓 哉 明 雨

=



同同大同同堺同同河同同西同同 大同同小同同大同同

阪 内 灘 阪 阪

同同其同同太同同泰同同笑同同 自同同兩同同凡同同

足

象路 平 《人 帆 子》 平



和同同同同同同同同同大同同神同同同同大同同金 歌 Ŧī. Ш 芦 阪 阪 玉同か同冷同さ同静同同賀同同卯同同豚同同孤同同銀 砂 名 舟 女 芽 生 郎 舟 子 仙 痴 笑



島同大同長同姬同平同神同島同名同長同島同 古 根 阪 戶 根 屋 庫 取 B 花同欣同菱同觀同千同小同高同仰同高同穗同二同珍同 瀨 波 子 竹 月六 蓬 屋 天 峰 情



職 ま れ ず忍んだまゝで終りが來 恵 ま れ ず忍んだまゝで終りが來 恵 ま れ ず忍んだまゝで終りが來 恵 う 用 の な い 庭らしく後 っ 一 の 子 が小さく見にる入學日 たしなみにしてもあんまり塗りすぎる う ち の 子が小さく見にる入學日 た り 用 の な い 庭らしく後 っ 日 の な い 庭らしく後 っ 日 の な い 庭らしく後 で と んな事出來ますかいご義理堅し を んなに喰へるかいと緋鯉はかり を んなに喰へるかいと緋鯉はかり を と る に し ろ ご 金 も く れずに を んなに喰へるかいと緋鯉は泳ぐ そんなに喰へるかいと緋鯉は泳ぐ そんなに喰へるかいと緋鯉は泳ぐ そんなに喰へるかいと緋鯉は泳ぐ を か た てを見せたい門の立話し が た てを見せたい門の立話し が た てを見せたい門の立話し が た てを見せたい門の立話し が た てを見せたい門の立話し な らぬ の 望 に な つてる午後一時



同大石同大臺同島同同大東同同大同丸同同同大同山同

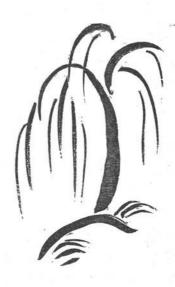
阪川 阪北 取 阪京 阪 龜 阪口

扇正太靜か冬青耕佳幸秋竹赤同耿同柚同惡同聞同維同 す木 蘭 源 茂 山吉魚香み立水民風泉水葉丹 三 坊 太 路 介



着せかけて居る母親の背が低しい内午 まなくて一人病んだら淋しからうチトふざけ過ぎて娘の氣をそんじチトふざけ過ぎて娘の氣をそんじチトふざけ過ぎて娘の氣をそんじチトふざけ過ぎて娘の氣をそんじチトふざけ過ぎて娘の氣をそんじりので見た電話こつくに賣つておりからりた電話こつくに賣つておりかけて見た電話こつくに賣つておりかけて見た電話こつくに賣つておりかけて見た電話こつくに賣つておりかけて見た電話こつくに賣つておりかけて見た電話こつくに賣つておりがは、本車 蟻を 浮かせて通りはじめる み 中 が な住居に車撃父こ居る母親の背が低さる気がんせぬこころを馬は足に見せめだんせぬこころを馬は足に見せが低して居る母親の背が低しし

同京兵 香 兵石 大兵 同同 大 石 大 盤 鞍 長 同 同 大 山 同 大 山 九 都 庫 里 庫 川 阪 庫 阪 川 阪 池 山 春 阪 梨 阪 口



### 朽 洞

麻 生 路

何でも、自分の句でもいゝが、古句をパラ パラフレエズする何は古句でも、先輩の 習慣なごの知識が必要であるから、最初 ブレエズするにはその時代の人情、風俗、 は先輩の句や、自分の句をパラフレエズ ラフレエズするここをすいめたい。 句《 作上の研究方法の一つこして、句を

を訊くここが出來るし、自分の句であれ ものを、直接その先輩にしめして、 するが、便宜であらう。 先輩の句であれば、パラフレエズした その句を作つた動機を知つてゐるか 可" に盛らんこしたものを充分盛り得たここ

6. であるこいふ意味では無くて、作家が何 その時には其句は叙法に於て失敗してる 分に盛られてるないこ云ふかも知れない にはパラフレエズしてあるだけの意か充 こさが出來やうこ思ふ。しかし、パラフ しかし此の場合の成効こいふのは、名句 ゝば、その句は成効してゐるのである。 レエズしたものを先輩に示した時、 レエズよりも何の方が巧であるこ云はれ るものご見ねばならない。又そのパラフ かなり適峰なこころまで散文化する 原於何

> うご云はれればパラフレ 充分解するここが出來るけれごも、このとはない。 ある。 さうしたこころに句の研究が必要なので はれる場合もないここはないであらう。 の謂である。句は巧いけれごも、パラフ パラフレエズでは折角の句が泣くであら レエズミは違つたものミなつてゐる言云 パラフレエズにより句主の心持は エズが拙たこい

もちをす分違はない程度に散文にするこ 句の心もちが充分解つてるても、その心 ふこミが云へる。 他人の句をパラフレエズする時に、原

70 乏したミころのこゝろもち、即ちその句· なるからである。しかし、このパラフレ 字だけ原句の價値を低下せしめるころに に蛇足を加い、一字云ひ足りなければ一 あらう。一字云ひすぎれば一字だけ原句 のリズムを藉りて、これを表現しないで して、それを取扱ひ、決して川柳こして 來ないのがほんこなのである。若しそれ 0) こは出來ない相談である。自分の句でさ しての缺點を明かにするここも出來て句 さを會得するここも出來れば、その句こ の焦點をはつきりこ知るここが出來、從 つて他人の句の企及し得ざる表現上の巧 エズによつて、益する點は作家の摑まん 出来ないのであるから兄んや他人の句 出來れば、 パラフレエズが完全に出來ないのは出 一の参考こなるからである。 作家は、はじめから散文ミ

あるから、句が讃まれる時に、その媒體があるから、句が讃まれる時にうつたへるので

ければならない。

一行に假名を多くする。時には全然かな一行に假名を多くする。時には全然かな一行に假名を多くする。時には全然かなればならない。しかしある文字は漢字はかりでもいゝ場合には、上こ下の連絡上讀つてもいゝ場合には、上こ下の連絡上讀さあれば漢字にするここもある。假名にするここを表すのに適するので、特に漢字は强さ、整義がみを出すこ、反對に漢字は强さ、整義がみを出すこ、反對に漢字は强さ、整理なるを表すのに適するので、特に漢字でなければならない場合もある。

をはかない。 大假名は字割が少いの三直線の集合であるために、書籍が非常に簡単で且つ平 あるために、書籍が非常に簡単で且つ平 あるために、書籍が非常に簡単で且つ平 の三なくぎごちない感じがするので主こして科學に関するものの發表記號こしては何 して科學に関するものの發表記號こして して科學に関するものの表表記號こして

であらう。平假名はその話に於ては曲いであらう。平假名はその話に於ては曲いであらってるて、韻文の媒體をしては最いであるから一種の優美さる柔かな。 これを はんしょう こまる。

のかなり多いここに心づく。

自分の何を拿重する上からも脱字に對自分の何を拿重する上からも脱字に對しては特に留意されたいものである。誤いるここである。何のもつてゐる感じなりなった。 これが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字につれが表現の媒體であるこころの文字に

て現代句だけに限らない。古句に於てもなから、日本の言葉であらはすここは云とされてゐる句もかなりにあるここは五人されてゐる句もかなりにあるここは五人されてゐる句もかなりにあるここは五人されてゐる句もかなりにあるここは云

=

由為 用するなご、 普通語を主さしこれに俗語なごを巧に活 である。 知られてゐる通りである。 水 な點からでもあらう。 ルトガ た語が用ひら が語 つは川柳が、 その表現上 外來語に對しては頗 スペイ れてゐるここは ン語 その時代々々の の規矩に頗る自 川柳は短歌な 又はその轉訛

特殊階級にのみ使用される語を無闇に句 こて、一般化されてるない外來語やある 地でストー 満洲に住んでゐる人であつて見れば、露 るて不思議でない如く、 それをも、 投句に、 オ からう
三思つ
たからであ して扱ってるる譯である。『近作柳樽』の 0~1 3 ヤボン スボー した日本語に置き換へなくてもよ チカは敢てストー 1 ヴ そのまゝ生かして置いた。内 ツなごは勿論・ ごいふ語が一 チカの語があつたが、私は ハンカチ、ア 20. 30 ヴや暖爐 もう日本語ご 2 句の句主が テナ: ラヂ かく云へば 使はれて なご

由であつても容されるここではないこ思い中に挿入するここは、いかに川柳が自

のけば率ろ滑稽であらう。 のけば率ろ滑稽であらう。

合は、 その人のもつ語彙は知らず識らず豐富に は違ひないが、 である。 こごは、 なつてゆ をひくさいふこごはかなり 間\* 應解書をひいて見る必要がある。解書 のであ かなりあるが、 つて使はれたものが慣用される場 もしあやし 自分からするんで使はないこ くここを思へ かくするここによつて、 いき思つた場合に ば決して徒勢では なるべく間違った 面倒 なここに

ければならぬ。

獨多が、

自分の

かり外に

いそれだ

あるため難解な句言なつたここも考へな

解こいふここを問題の外にして 的な難解句きなつてしまうであらう。難 屋の營業上から云へば『ヒチヤ **こいふ字はシチであつて**ヒ 告が三つほごあるが、二つは『ヒチヤ ければ、 チミいふ方言を用ひたならばそれは郷土 あらうが、私達が何にあらはす時 してゐるここは必ずしも誤りでは こしてある。一つは質店こしてある。質 一茶の句なごにかなり信州方面の方言が 私の家から、舞へ出るまでに質屋の廣 訛つてヒチで通用してゐるから、質 あらはせない場合は別である。 チでは 方言でな さ廣告 ない t

ばならない。 はならない。 はならない。 はならない。

けの準備はなくこも無闇に方言をもつて

ここは避けたこいふ話があるが、國語に譯す場合に、譯し得られぬ

尚狭少の範圍にしか通じないのであるか はない。 ら一層難解の何ミなることはまぬがれな 同様のここが云はれる。否、方言よりも 所謂専門語に對しても又方言こ

句の價値は一部の人達にしか認められな は避けるにこしたこうはない。 いのであるから、止むを得ない場合の外 たこへ巧な句が出來たこしても、その

與へる言葉を選むここも重要なここであ 同時に、朗吟して耳にこゝろよい響きを 眼にうつたへるために、文字を選むこ

つてゐるミ、いつもその語が飛び出して 使つてはならない。間に合はせの語を使 ればならない。次して間に合はせの語を 又表現については適確な語を選ばなけ

> 素の準備が必要である。 來てピント外づれの句ばかり出來るここ さうした癖がつかないやうに平

使する上に於ての不用意さから來てゐる 久に遺るべき句こはならないであらう。 その原因は右に述べたやうな、瞬齣を駆 達の句は豫選に入つて本選に落ちてるる るら作家だこ思つてゐるのに、さてこな 句集なごを編む時に、常にかなり抜けて のである。 るこー何も採れない場合がある。その人 たこへ、その句が入選したこしても永

が、尤も適切な語を探りあてるまで推敲 で、何れかに決定したこ云はれてゐる。 しなければならぬこいふここは文章に のを表現する名詞、動詞、形容詞は一つ モウパッサンは先生のゾラから『そのも は必ず、同意語を七つ以上考へ出したよ かない』こいましめられたさうである ゲヌングの如きは女の重要な點に於て

つたこぎでは

川地 柳に於ても又、 この言葉は眞理であ

語が出來上 い人達はいつの間にやら、 句を表現するのに、 適確な語を選まな 自己流の慣用

が ちつこも『……の様に……』でもない句 樣に……」こいふ句で満たされてゐる。 るやう筈がない。 までそれを用ひてゐる。 選句をしてゐてよく氣づくここである ある人の作には、いつでも『……の その句が生きて

句は常に創造であるべきここを忘れては は感激によって生れるべきものである。 に句の職人に終らなければならない。句 れでは句の製造であつて、 ならない。 つけて句を拵へてるる人達もあるが、そ 又『灯がこもり』をごこへでも、くつ その作家は窓



# 漱石さんの「坊ちやん」

リカスキん」 長野

は、夏目漱石さんの句である。 長 け れ ご 何 の 糸 瓜 こさ が り けり

先日此の句を見て

フト夏目さんの事を思ひ出した。

今年は丁

をとう、、 とかん きゃらか はつの、 いまか い この 後に、夏目さんの事を書き はなからうこ思ふっ 皮夏日さんの十三回忌にあたる。この機に、夏目さんの事を書き はっ

地下で夏日さんは、ソウれ位の事は、何の糸瓜ミ笑つてゐるか漱石は、ソ石でなくて、やつばりソウ石の方が正しいらしい。

ら知れぬが……。

夏目さん以外に、漱石こ名乗つた人が有つたかご、色々探して見たが、夏目さん以外に、漱石こ名乗つた人は、除り見あたらぬ見たが、夏目さん以外に漱石こ名乗つた人は、除り見あたらぬ縁である然し、無いのでなくて、私の方がよう見出さないのかも知れない。尤も、漱石によく似たので、味石こ言ふのならある。建治元年伊勢に生れ、観應二年に七十七歳で寂した夢窓國る。建治元年伊勢に生れ、観應二年に七十七歳で寂した夢窓國る。建治元年伊勢に生れ、観應二年に七十七歳で寂した夢窓國の事だが、漱石こ味石ごでは、ムソウミコムソウ程の違ひが節の事だが、漱石こ味石ごでは、ムソウミコムソウ程の違ひが節の事だが、漱石こ味石ごでは、ムソウミコムソウ程の違ひがある。

彼は清代では、洪昇や孔命任や其して萬樹等さ共に、鬼筆を振されば、八百十八有る。清代に出た戯曲家で、江寧の人、名は張図文那には一人有る。清代に出た戯曲家で、江寧の人、名は張図しな

柳蹙---等の作を残してゐる。夢梅懷玉こと以上の戯曲の頭字のた戯曲作家で、玉燕堂四種--夢中綠、梅花巻、懐沙記・玉彼は清代では、洪昇や孔尚任や其して萬樹等三共に、鬼筆を振彼は清代では、洪昇や孔尚任や其

ちゃんの激活が石を、 漱石は小説家で、玉燕堂四種の様 我輩は猫である等を残 した。 なもの 更りに、 坊つ

日本は 漱石は、 其の『猫』の序文に

りご尻を据 え た る南瓜か

の句 だらう。 じく瓜で言ふ字のつく所を以て見るさ、南瓜も糸瓜も を載せ、其して次の様な事を言つてるる するのに別段の不思議もない筈だ。 親類付合のある南瓜の句を糸瓜佛(正 岡子規のこさ)に 親類の間

3 漱石も親類の間柄だらう親類付合のある 支那の漱石の事を言ふの 別段不思議はあるまい。 じく漱石で言ふ 字のつく所を以て見るで支那の漱石も、日本の 此の文句を借つて私に言はして貰へば

1/10 だが、 地 の底の漱石達は、 造しい 顏温 をして笑つてるかも 知れれ

夏目さんには、甚だ濟まない事だこは思つてゐる。夏目さんのなっ。 譯者の名は忘れたが、 夏目さんの た『坊つちやん』を讀んだ時には: やん」である。 を言へば、正岡千規さんの事が思ひ出される。夏目さんは、 ふき、 今でも一寸ウン もので、 其の 時には面白い、 私が一番最初に讀んだのは、 見に角其れから後は、 ザリする。 こ思つたが、 悪い印象を受けたものだ。 さつぱり面白 「坊つちやん」こ 後に英譯され 例の『坊つち < なかつた。

> 俳人であ 松計山江 なもし』の言葉を使つた伊豫の松山人である。 の末廣町のさる寺にあ さんこは親交があつた。 る 私ご郷里を同じくしてゐる。 E 聞さんは、 てから E\$ ちゃ の知り 聞さんの墓は ねや」 る通りの

だ人は知つてるだらう。私は子供心に、 夏目さんも、 てるた學校を知つてゐる。 一時松山に居た事がある。 夏目さんが教鞭を取 がり ちやん」を讀ん

人通 屋が出来てゐる。 其處の息子さ私は仲か好くてよく遊んだが、今は何處に行つて 迄ヌッご出て、 其の學校の校庭からは、せんだの大木が、 人の噂だから、 學校は移轉した後であつたので、 今では其の學校 かつた。學校の運動 £ はあるとり夏目さんの居た學校を見る爲めにやつて來たが、 てゐる。これは、嘘か真實かは知らないが、 **ゐるか、** 関いてゐる。勿論これは一平さんから直接に聞いたのでなく りの少い暗い所だつたので、 判事に 消息 を絶つてるるので解らぬ。親父さんは、 枝が無氣味な恰好をして長く伸んでるた。 間違つてるたら一平さんにお詫して置く。 なつてるた様にも思ふ。 運動場の隣に、 は 野間君の家の横に、汚い共同便所が有つた。 其處を引拂つて、 野間ミ云ふ辯護士が住 あの木の下を通る時は怖ろし 一平さんは失望して歸つたさ 跡には赤十字病院 今は、 土量を越して、 岡本の 其家の跡 平さんが、 香がはない んでゐた か建い 往れない 夜気は

の向い のまい 在る闘書館だけであ つてる ちの は其の 便所 3 往來を だて

から玄関迄は御影 石で敷きつめてある。 る

三夏% いてあ さん 7 te 0 は言つてるが を記憶 してる その通 0 門於 から立場 をづく こ石が敷

夏目さんは、 の家は、夏目さんが宿つてゐた旅館さも 松山で「 。さうぢやなもし』の言葉には、留つてゐた旅館さも學校さも近い い所に かなり あつ また 參

「…第一先生を捕まへて、なもした何だ、菜飯つてゐた樣である。 3. お江戸下りの夏目さんが、なもしに面喰つたのは歴理もは遠ふぞなもし」と言った。いつ迄行つてもなもしを使ふ奴だ。 んちやない」さあべこべにやり込めてやつたら「なもし II 田樂の時 より外に食 ご菜飯

であ なア 10 10 いるの松山 7 30 t だが、 2 の、なもしは、次第に若い人達から遠さかつて行きおい美しい奥さんや、ムスメさん等か、松山人特有若い美しい奥さんや、ムスメさん等か、松山人特有若い美しい奥さんや、ムスメさん等か、松山人特有若い美しい奥さんや、ムスメさん等か、松山人特有方、下りの夏目さんが、なもしに面喰つたのは無理もない。 0) ŀ

使ひ脚 夏なっ 3 さんは、 てるる。 れた間。 の気のせ、然し、 奶 0 松山言葉で一寸違ふ様な氣がしてならぬ。 所々に妙な言葉をはさんでゐる樣である。 残ぐ いっぱい なもしをかなりよく活躍 いかも知れない がの なもしをかなりよく活躍

あ

30

夏目さん 温光 の南部の 田の温泉によく 夏目さんが言 へ行つた様である る 町には妓樓が有りまり道後温がありまり道後温

> る。 30 言ふ宿は有る。然し、其の當時のまへの宿屋か否かへ置人つた赤シャッを山嵐三二人でやつつけるが、 「坊つち 後には私の母が住んでゐる。夏目 らやん」の中で、 B まる」 山嵐さ坊つちやん さん が温泉 おかは疑問であるかは疑問であり、現在角屋これの町で、角屋

三風ご言ふ先生が出て來る。山嵐、は現に松山でピンしか無い、小さな町だ。『坊つちやん』を讀むこ、言つてるが、實に其の通りである。松山こいふ所は言いるが、實に其の通りである。松山こいふ所は どうも狭い所だ、出てあるきさへすれば必ず誰かに逢 30 は、 あの中に 猫智

日さんは、叡山の悪僧の日さんは、叡山の悪僧のてゐるが、其の質英語の先生だつたら、其んなのであるが、其の質英語の先生なのない。 別くこ夏目さんのるた部屋は、其の、城屋は今のきごや旅館の事で、先日では極めて念入りなものであつたこ、さ 聞。城、は 0) 見たもの でな 英語の先生をやつてるたのである。世の先生をやつた様に『坊つちやん』に、「其んなにも見いたらう。 1 事で、先日大修築をやった様だが噂には、其のまゝ残して有るこかな、 っ、確かな事よがして有るこかな、 から、 した。 其の講義 山、

理な野質 馬歌 ほ氣泣水手 S. 熖け 明水 らに きあば 鉢 た見舞ふ み 甘 けら \$ (1) 足 ちは問 はな のてて 水 洗 L 出い す れが 三句 82 T した な し先 がら 居女はひて は 都 る闘つき夫事にてか 世 金 K~ 5 肺 K ょ 妻 かけを安 つ金横 重 靴が なしがり もをれず なし 行 外 き田 n 1 け要 屆 10 なしりり 3

聲

郎



#### JII

L

柳

塔

サロ入そ父 喰薄 意 クラが口の母 ふ紙見 3 # は をす よ五 ンあを死が 4. や隔る 3. すつ開に在 年 食て親 生 はン父 た > たけ合ま \$ 下 0) 5 かにへせ T が ず戸舌 君出工変し 明三 來 できが H 年 to の松をの三 のて、主頃川人添も岩 ううつ か 痩來のをの 子 な枕抱片合をてれ本 せ 200 面 たここ 彼こり 粉 占るて 育 白琴や ひる來素

七七

恙新 消不お父 雲月 傘腹遲强 踏器 は松 上拾 置がか情 の見 きの の本 息景寺の な世新 役殘 子な柳友 が氣さ留 けたれ 峯 散葉 俺草 く帯が の均 はつ早な 5 N 0 誘ど秀 やをん守 0 祝 ひ淋毘が附何ね す今 疲かか子 を靴 二夫以 おー れいれへ にし愛 背の て加がだ 嘘 日 人 ご (音) 髭に たミ欠し 來く孃 戀税おり のの 8 の女 て埃 た父悼 様お伸一 人のかよ 數氣 塵 家て が 成 を房 にこしい にだに三 るは 女持 にの 水て貧人楊 や畫竹 今に 安 知の桑 なごかの なも ん片 るけ立 つか笑で 日似 3 ら氣 20 が奴てち井で附 0 本 なが原 てらつま 幕て西 てを 垂がる止 るけ る話てた 立。 る當 ん動 く買 れるるり一るる 戾 だき京 柳 るひ るし出り 50 門 南 子 Ξ 郞

婧青四魂 看 戀新 歸名鶴失り 養 流待 安惡 二新 " 曳草疊は 護 い友 日開 人し 行ち ら門嘴職シ 蠶 にく 婦 1. の半 でへ 哲學 20 3 o F ♦ ののがン 骨地 この女京 おた〇 せち◇ 0 ご光前を押 0 い駄 ろ凹の人 < 0x うご の下 今 夫 のし つ同 あ駄 こみ三形 オレオレ B ヹヹ てを給く 婦 氣い がにあ TT は 風ひ 00 かく 観仕椅 よだがに にて は 場下 の花 冷 占過 した学 别 思行 所か け札 た 敷ぎ うのまみ か屋 な ふく中豫 < か妾電ら喋中 るご乗 解る水ちら松 に忘りな水 に處 ナ寢 い妻 宝 田 算 をれにす谷 111 フて重つ 島 てで田 の丘はも 困な眼た を匹過はこ 蓮句 タ居 T 越もさは るあ リた白 鐵へのせれ 鮎 ッた 黄ひひ町 濁 3 b りし隠 T し居ぎれる 鷗 彩 洲 美 水 子

吸ま 流今こ行新 岩 ぶ打金差夏佃親 牡 行まのき兵 頭室江と しち持し近煮の 鱱 船 歌で御ミ 東は恩いの 0) 粒 たて橋ねてににより女め丁 西妻忘く淋 の戀言云來橋手のば稚 家され掃し T か呼は除い を可へるを許し江す し鮮々 ば 下巢 ばも渡に首戸ご らばせに笑 女 女淋 遊のにくを干えるして中水いばエイスを居工 悪軽五 聞れぬ料顔 な川 5 が ぁへ かてが亭親朝呼 居お暇 0 5 75 話ち さたかなに田か は心美五なたて田議う 戀子 すかし関し話しま しあ to れもしこ見 1) のとてきせ新る まからく也てしひ奉のは晴光 聲ん

> 圓 不二朝托花火 景階顏兒賣貰 氣への所りひ の繃芽ののの 雨帶つイ花春 許をみンミく 干てコ娘れ 10 りしは物をが L ふ爪母食見た るがミひ殺に あし景 竹のくきに氣 格びらてすか

子るすきるち

3

秀

あ全湯

のく屋

女澁若

の茶葉

あがが

る呑萠

が受月

路

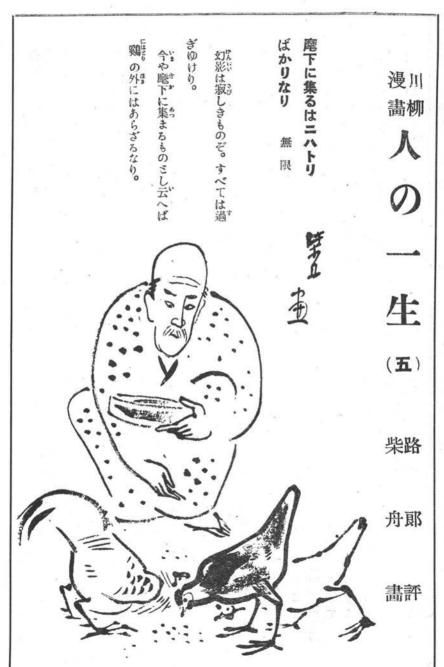
峰

雨七鏡あ團懸 遺脊何い還歩は心 の音臺ら扇命 書のんゝ歴むな配 夜にい手に 子ご氣 娘や ご坐あに稼大 にの今だにのかは 叔不云てな裾に三 しるら好い て言い々で阪父平はたつか女度影 敷 たの男衣こる だやれし、ち工茶 浴爺る けたよたて春惱漬 か任馬にはを 思らうご女のみで T ひに三女にほを濟長 な鹿心なう塚 痩 たりら 當そも將まの唄 せ 果にびにま崎 るり差涕た見でせ崎 T 大た見らけれ こ返向か迷り消ご る た しんてるて 松 こりひみひてしき柳

郎

水

九



### 企てに父は驚くまい事か



せざりき。老ひの涙、老眼鏡を かゝるここあれこて、教育は

つたひね。

## 先生に問はれて親は嘘をつき

源

坊

ざいません。昨夜は宅に居りました』 る事は信ずる與はざるなり。 「うちの子に限つて、そんなここはご

こ否定す。

先生、その手には乗らず。



### 子のことで最後の唇が 動きしか

郎

もはや、病苦を訴ふるにはあらざ

ののけり。 いこし子のために、最後の唇の動

きしものか。

も酸するものなし。(終) 周圍の空氣は灰色に——又一語を またり





## 松郎紋太

## を死なう 石 竹妻としていつそおなかの子近作柳樽 松郎提出

句さして提出する。 どういふ句意か、句意が分らないので、問題 どういふ句意か、句意が分らないので、問題

確りこした句だと思ふ。山雨樓……僕も此句は疑問こしてゐる。川柳三しては暗示に富んだを異にしてゐる。川柳三しては暗示に富んだを異にしてゐる。川柳三しては暗示に富んだを異にしてゐる。川柳三しては暗示に富んだ。其際想はれてゐる。川柳三しては暗示に富んだ。如此日本代的な家庭を思はせる。在來普通に取扱はれてゐる。川柳三しては暗示に富んだを異にしてゐる。川柳三しては暗示に富んだ。如此時代,此句以表明之した句だと思ふ。

する點が明らにかされて居ないのを 遺憾さ松郎……紋太氏の説では今一つ私 の不明さ

て良いかに迷ふ。

は大……強いて事件的に解釋すれば、近代的数太……強いて事件的に解釋すれば、近代的なが、全然川柳味が無いなが、所謂從來の川柳味なるものこ受取る。而しての覺悟を言ひ表はせるものこ受取る。而しての見ひ迫れる感じが、餘事を語らずナツキその思ひ迫れる感じが、餘事を語らずナツキをの思ひ迫れる感じが、餘事を語らずナツキをの思ひ迫れる感じが、餘事を語らずナツキをの思ひ迫れる感じが、餘事を語らず大の故る。而しての覺悟を言ひ表はせるものこ受取る。而しての覺悟を言い表はであるが、全然川柳味が無いない。

解するに苦しむ。 の境準より此句の價値を云々され る氣持を松郎……然し强いて解釋すれば ……ぐらい

の感情は受取り得ない。 練らなければ作者の言はんご欲する 突きつめた感情を表はさんが爲めに、表現上 ころから見ても、ごうも此句は表現上に缺陷 由でばあるが、私には左樣に感じられないる 詰めた感激を受取るこさは、評者さしては自 居られるのではないかさ思ふ。それほど突き かを捜し當てんさするが如き、明確を欠く點 無いかさ思ふ。寧ろポンヤリさした中に何物 也さの御説は除りに考へ過ぎら にし句意は解つた様に思ふ。暗示を含める句 山雨樓…… な事件を含んだらのならば、尚ほ一層表現を ある。若し此句が前に紋太氏の言はれたやう の缺陷をあらばすこさは往々有 ありさ認めの譯には行かめ。主觀の句さして をよい意味に さり暗示的さして買ひ 種々御説を拜聽し、朧ろ氣ながら 勝のこさで れたのでは 被つて さころ

紋太……不思議である。僕は前に述べたやう

#### 山雨樓提出

## 夢に風起り文字なき原稿紙

別者

き感じな受ける。具体的に此句の持てるものしたる淋しき、真白き光り深い底さいふが如 紋太……僕は句を事件的に作り、事件的に解 定すれば、散らばれる元の儘の原稿紙を指し が分らず、「どうも私の解でなく他に何かあ 散らばつて居たさ云ふのではないかさ 思ふ ば、そこには依然さして白紙の儘の原稿紙が るうち、何等の收獲しなく何時しか疲れな覺 はないかさ思ふ。書齋か何かに居て思索に耽 さ思ふ。事件的には解しやうのなき、暗澹さき るな得ない。私の感じは此句こそ暗示的の句 する様に習慣づけられてゐるが爲めに、斯く るのであらう」若し私の解その儘であるこ假 それにしては如何なる所に感激を置いったか へて眠りに落ち、ふさ夜更けの風に目覺むれ 松郎……僕は斯くの如き場合を际んだ 句で 「文字なき原稿紙」この叙法は苦しいさ思ふ 如き句に出合へば、大いにタゲーへきせざ 問題の句さして提出する。 雨樓……疑問の句である。 の氣分が分ら

> なり人生なりを考へさず、幾分か暗示的な句「人類史酒はいづこへ流れ行く」の方が思想 には一層暗示を含んでゐるきの 紋太氏の説 じられない、光程の句にも暗示があり、此句 氣紛れにも等しき他愛もなきこささしか 感 て句意なり氣分なりに、或る感じを浮べるこ 山雨樓……これも諸君の御説を拜 聽し始め に成功した非常に暗示に富める句と思ふ。 的な、閃めきを持つものである。此句はそれ いかで思ふ。然れ共斯種の句は時でして靈感 たので、その後をすらくこけけたのではな して「夢に風起り」 こいふ語が口をついて出 は夢のみで、後は夢中のことを叙せるのみ… さ云へるであらう。 た價値を認めることが出來ない。寧ろ次の句 情表現上の遊戯にも等しきものである。大し に斯くの如き摑み所の無い句は、安價なる感 に對し、私は疑問を持つものである。要する が出來たが、然しその感じたるや、 失禮ながら作者は案外に、深き考へなく 一片の

う。 はいかこ思ふ。全然價値が無いこは言へないだらがこれでよく表現されてゐるさいふ 程度のがこれでよく表現されてゐるさいふ 程度のがこれでよく表現されてゐるさいふ 程度のいかこ思ふ。若し前説の私の解が許されるないかこ思ふ。若し前説の私の解が許されるないかこ思ふ。若し前説の私の解が許されるないがこれである。全然價値が無いこは言へないだられば、少々酷ではな概率……此句は山雨樓氏の後説の如く、遊戯松郎……此句は山雨樓氏の後説の如く、遊戯松郎……此句は山雨樓氏の後説の如く、遊戯

此句が遊戯的であるか無いかは作 者の信念

一つにかりるこさださ思ふ。作者が自信なく

の句勢から推して、さうは取れないさ思ふ。紋太……僕は松郎氏の解に疑問を持つ、此句

十分に燃焼せしめすして、字句の上で意識的十分に燃焼せしめすして、「かる傾向に對してはぶものであるさして、「かる傾向に對してはぶものであるさして、「かる何能度は、感じを弄いて思ひ出した句であるが、「液しいも秋、驚いて思ひ出した句であるが、「液しいも秋、驚いて思ひ出した句であるが、「液しいも秋、驚じを弄に纏めあげようさする作句態度は、感じを弄に纏めるが、そして深味を持つた暗示性こそ川柳に望みたい。

#### 紋太提出

## 

のださ思ふ。若し此句に前書があれば句さしのださ思ふ。若し此句に前書が出此の作者の境遇優れた句さは思へない。私は此の作者の境遇優れた句さは思へない。我は此の作者の境遇を知つて居る為に。實際よりもより以上そのも見が不治の病床にあるこさ、それを母親が不眠不体で看病してゐるこさ、それを母親が不眠不体で看病してゐるこさが親へない様不眠不体で看病してゐるこさが親へない様不眠不体で看病してゐるこさが親へない様な績がしてゐる。然りさすれば句の價値が餘な場がしてゐる。若し此句に前書があれば句さしを知が、不思不体で看病して思る。謂字以上的意味。

30

就いては別に意見なし

### よう嘘をつく唇の尋常さ川柳塔路郎提出

常さ」はも少しなだらかな語を置きたいさ思いからである。叙法から云つても下五の「寡れてゐる樣な句の樣に思へて、私を惹付けなれてゐる樣な句の樣に思へて、私を惹付けない。さいふのは既に言ひ古さ松耶……輕いカガチの樣で面白味さいふこ松耶……見付けごころこ云ひ、叙法之云ひ非路耶……見付けごころこ云ひ、叙法之云ひ非路耶……

或る型に はまつたこ云ひたいほごなだらか或る型に はまつたこ云ひたいほごなだらかではいっそれから此句を里にカガチを脱つて作つた句が有るさいふ事さ。カガチを脱つて作った句が有るさいふ事さ。カガチを脱つて作った句ではその間に作者の態度が違つて ぬるここではその間に作者の態度が違つて ぬるこれが (僕はさう思しない)を対している言葉ない。それが、後の云ふ面白い句である こ云ふ意路郎… 僕の云ふ面白い句である こ云ふ意路郎… 僕の云ふ面白い句である こ云ふ意路郎… 僕の云ふ面白い句である こ云ふ意路郎… 僕の云ふ面白い句である こ云ふ意

嫌味は少なく、此の唇な素直に見詰めたさこ

推称したのである。 地称したのである。 地場合け型にはまつた制に駅まれてあるが、地場合け型にはったが、僕は類様な感じは誰もするかも知れないが、僕は類様な感じは誰もするかも知れないが、僕は類に敬服する。それから此句に類句が有るされから此句に類句が有ることに非難し得ない程度のもので、此句を相称したのである。

松郎… 自分が云つたウサチの句で あるこ 松郎… 自分が云つたウサチの地でして作った句と からば、もつこ然を言ったここで、此の語以上の語ももつこ然を言ったここで、此の語以上の語いたいこ思ふのである「零常さ」こいふ楽ないたいこ思ふのである「零常さ」こいふ楽ないたいこ思ふのである「零常さ」こいふ楽ないたいこ思ふのである「零常さ」こいふ楽ないたいこ思ふのであることで、此の語以上の語を持つかでなく、作家さしては常に心掛ければならの點であるこ思ふ。

下五に對しても別段非難を言ひたくな るに、川柳の鑑きざる面白味を感じられ 30 4 0

### 雨柳提出

#### 丸刈になつて世間 を欺む か 郎

路郎……僕はその思索に對しては、それほど 纒つてゐるさ思ふ。ちつき考へてゐるさ何處 が違つてゐるさは思ふが、死に角句さしては 山雨樓……僕はそれを思索的ださ思つた かに、こう作為の跡がありはしないかさ思ふ 路郎…… は進んでもよい道であるさは思つて ゐる のである。此の行き方も、確かに川柳さして 者の心持だけな尊敬して、何時も眺めてゐる なりたいさ思ふ氣持を削がれて了つて、只作 故に此句を讀んで愉快になったり、心持よく 澄しこんで句を作つてゐる様に感じられる 僕に握手を求めてくれないで、ズツミ向ふで は心ないか、僕は斯ふいふ句を讀むさ作者が ほどのここではないが、少しの不良味が有り 出來るか、出來ないかであるが、言ひ立てる 紋太……その社會觀なり、人生觀なりに賛成 私は何處までも敬服してゐる。 的な内容を盛り得たことは慶びに 堪へない な意圖も覗はれる。川柳が斯かる所まで思索 き思ふ。又作者の思想を統一するさいつた様 對して不滿を持つ作者の意氣を示し てゐる 觀なハツキリ己盛つてある己思ふ。世の中に 雨樓…… 松郎氏の句さしては、 此句には作 者の人生觀剪に社會 多少 行き方 03

> ふ意味では夾してないのである。 ないのであつて、句さして拙い句であるさい あるから、作者の技倆に對しての希望に過ぎ なるさ思ふ。勿論此の言葉は作者が松郎君で こんだ句さされたならば、一層よりよき句に どうしても思へないのである。もう一歩突つ 為に作家さしての重味を加へる ものさは 此場合崇つてゐて、これだけの句を啄んだ 味を持てない、作者が持つ技巧さいふも

生れた表現であるさ信じてゐる。こういつた山雨樓……僕は飽迄これを作者の思 索から る譯である。 想に對しての作者の創作態度を敬服 してる

山雨樓……多くの聯想さは色々な場 多くの聯想を呼び起さない。 紋太……此句は批評を求めてゐな い。此 合に 句は 取

紋太……作者一人の言葉である さ云ふ感じ山雨樓……批評を求めないさ事ふ事は。れ以上何等の興味く惹かないさ思ふ。 ふのである。只言葉だけの感じは受けるがそ 紋太……事件的の聯想を呼び起 さない れるが、ごんな意味の聯想ですか 艺云

多少の作 路郎…… 觀念的な句ださ思ふ。だからそこに 思つてゐるのださいふ風に取れる。 ない思想的な感情だる思ふ。 を與へられる、他人はごうあらうを俺はこう 雨樓……勿論これは喜怒哀樂の 一篇があるさいふ様な感じ がするん 感情では

紋太…… えゝ、此句に對して激賞された山 さうだすた。

> が十分に表現し得てゐないのだらう こ思ふ 滿である。私の思想的な句ではあるが、 によって成つたさいふ事は、作者さしては不あったが、私もさう感じられる、此句が作為 ならんさ思ふ。 私さしてはもう一歩進んだ表現に 生きれば の許の中に、もつさ突つこんだ句に進めよさ への手前もあるが、先輩さしての路即 (ひろし・革邸紀) それ 氏

#### 111 柳 雜 誌 殘 本頒

特に左の値段でお顔ち致しますのであます。 欠本があるために 合本がってゐます。 欠本があるために 合本が出來すに御困りの方は 此際至急本社事務所(大阪市住吉區杭 全町六〇三川柳糖誌」の殘本がまだ少し本社に殘

十號、第三卷第二號、第四卷第一號は欠(但し第一卷第一號、同九號、第二卷第 第一、二、 三卷谷號 同 一部金拾 金拾五錢

#### III 柳雜 本 特

こい簡素な装幀です。此際左の値段で附(金文字入り)で書架を飾るにふさわ附(金文字入り)で書架を飾るにふさわな社では新しい讀者諸君の御希望に依本社では新しい讀者諸君の御希望に依 さい。 ) 单込

一卷及第四卷 卷 金开圓 參 圓 也

ī

年よわな七百歳 3 즲 **陈歲而不衰、少好 萨顓頊女孫、** かくみ N 少好

**岩龍馬進奏の事の中** 慈童を曲にしたもので、 の代のほろぶる迄は慈童 一名菊慈竜)こ云 0) 節を用ひたので いき 太平記十三 3 があ

ら理民安國の策 く心底に秘 彼慈竜君の空位を過ぎけ あるから、 傷を授けら いひ 記してみよう。 U いる童子を、 ħ 一帝の傍に こして、 世に傳へられず、 修王震旦に歸りて 四要品中の八句 3 移王は釋算か が誤りて 6 死儿 U 愛し 帝なの 此が時 後深か 或時 給な 不が死し

上をぞ越いける。

百餘年まで、

慈竜猶少年の貌ありて、

の上壽を保つた『其後時代推致

移りて

0

る。 傷を、潜かに慈童に授けさせ給ひて。毎年前の内を分たれて、普門品にある二句のを予たれて、普門品にある二句のを非確認を哀み思召しければ、彼の八巻を書館。第一篇、第一篇、第一篇、第一篇、第一篇、第一篇、第一篇 さい 宥智 朝に十方を一禮して此文を唱ふべし三仰い せら なる し忘れ せて、 の菊の葉に めて、 へ入る人の生きて歸るさ 群議止むこ ふ深山 初朝の れけ 毎まれる もやせんずらん三思ひけ 遠流に處せらるべし 下 30 へぞ流され ・葉に此文を書きつけたり 換骨羽化の仙人こなり、 お ……爰に慈童君の恩命に任 \_ いた露が落ちた谷水は震樂 こを得ずして慈童を 返此文を唱へ ける…… いふここな こぞ奏 けるが、 れば、 解系 てしけ も此る 若<sup>6</sup> 側は

方朔冠をぬ 武帝其の 面の長きがおかしき故に上の仰を笑ふにてはこれ ひければ、 を仰い へに、 さ、一寸ある者は百歳の壽命ありこ云事 をし給ふに、 よりも除るべし三申けるよし』(五色綵だが八寸ある程ならば、面の長さは一寸だが八寸ある程ならば、面の長さは一寸 くば彭祖が人中長さ八寸あ せければ、 彭祖は八百歳なり、 いは の姿なし。 て此る 不敬なりこて役人申上る、 おかしき故に笑ひたりこ云ふ 10 n 鼻の下に で頭をさけ、 を問ひ給へ に向ひて、 側に居たる東方朔大に笑 術を文帝に授け 魏を の人中こ云所のなが 文帝 ば、 なく、 面の長さは一丈 人相の書の話 わたくしは主 るべし、鼻の 主上の仰の如 の時、 東方朔が答 只彭祖の 東

屁の論に泣 滿堂貴客皆回 であろう 未成文、 各中は日本に俗説或は俚談 屁の論に嫁牛迄ものむ 氣 已有 か。杜 に嫁牛运ものむ 50 頭』尸子の『虎豹之子、 食牛之氣」 前の詩 らさすが女なり 優さ 小兒五才氣吞牛 い句では でもあるの 0

大學『湯之盤銘曰、苟日新日日新、居者の貧日々に新な借が 殖 え 田 みに新な で る 孝 行 さ 大學に 盟の 即 ま で も か き 大學に 盟の 印 ま で も か き

地主 湯 王さたらひへかきつけ 郷王の盥む だ 書 世 に 残 り 湯王の盥む だ 書 世 に 残 り 湯王の盥む だ 書 世 に 残 り

八九

本山には馬糞桃林 牛 の く それ山には馬糞桃林 牛 の く それが林之野、示天下弗服』また史記の周本桃林之野、示天下弗服』また史記の周本桃林之野、示天下弗服』また史記の周本桃林之盛、偃干戈、振兵釋旅、示天中於桃本之盛、偃干戈、振兵釋旅、示天下不復用也」

士ミも云ふ。

九〇

應接妙であつた。お妾はそれ以上こ云ふ言語は宰我子貢』こあるから、辯舌巧み笑部、子貢俱に孔門である、先進篇に『姿我、子貢俱に孔門である、先進篇に『姿が、子貢俱に孔門である、先進篇に『姿が舌さいが子 貢 も及ぶべき

のである。

学我は寧ろ侫辯で人に嫌はれた。論語の字式は寧ろ侫辯で人に嫌はれた。論語の中にも、『仁者之れに告けて井に仁有りか『三年の喪期已に久し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に久し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に久し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に久し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に久し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に入し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に入し矣』こか。問ひか『三年の喪期已に入し矣』こか。問ひる。

子貢は姓端木、名は賜、其の賢顔子に次ろち。舉而篇に『子貢曰く。切るが如くる。 學而篇に『子貢曰く。切るが如く、遂ぐが如く、琢つが如く、磨くが如しこ様、其れ斯れを之れ謂ふか、子写はは、其れ斯れを之れ謂ふか、子写なば、其れ斯れを之れ謂ふか、子写なば、は、其れ斯れを之れ謂ふか、子写なば、は、其れ斯れを之れ謂ふか、子写なば、は、其れ斯れを之れ謂ふか、子写なば、し往を告けて來を知る者なり』こ才を賞してきを告けて來を知る者なり』こ才を賞して言言のある。

藏宿は宰我子 質 にくごかれる

るの傳說に因る蜀王本紀云、爲蜀望帝淫蜀の望帝の魂魄化して、ホト、ギスミな魂魄は和漢で蟹ミほごご ぎ す

蜀人見杜鵑鳴、而悲望帝、其鳴如曰不如其臣鰲驪妻、乃禪位亡去、時此鳥嗚、故

を残し」 を残し」

に居て、 ひは夜を専らさして書かくる時鳥は置も 町人嚢底排卷上に「ふくろふ郭公のたぐ 柔弱惰慢の物にや、 郭公を好んずるは、「「整理にして人の心 聲ありこいへごも、樹屋草むらのふかき 養はるこかや、 ず、驚の果の中産まじへて、驚に を蕩かすにや…… もろこしの人は聞事を愛せず…… 變凶の も常の理にあらざる故に、凶なりこして なるべし、尤も哀愁の聲有 ろものにて、 へるも 夜高く おそろしきなり、 遠く飛て啼あるく、 あやしき事 いづれる常の埋にあらざ 郭公は陰氣の鳥にて、 おのれ子をそだて得 蜀帝の魂 何にれ

蜀王も鳥になつては名が高

JI

柳

家の

戶籍

調べ

#### 募

#### 職

雄辨をたのんで香具師にか下り

職ご思は

ず箱

屋

+

Tī

萬よし

山本

職だけで食棄ねる

#### 26-

何

### 淺井五葉選

智慧があり過ぎて本職棒に振り 本職 本職を逃れて植木鉢へ來 本職はこれさと名刺出して見る 美裝員あれが本職ごは見 本職もつまらんながらやめられ 本職を守り手堅う 付け は足 はたが恥かしい恥かしい て 本職ジッミ考へる の調子で駕を舁き す えず な 0 [ii] 銀砂子 かい節 石 穗波子 雨 竹 蓬 路

其奥を聞けば本職

笑

ふ文

職へひしく質が迫つて來

綠之助

路

本職を持つてゐながら遊んでる

聲

椙

元

紋

太

選

本職を知られてからやつて來ず本職を知られてから捨てたわけでタニ

平

Ш

砂遊びしてはならない晴箐の子 砂を噛む様な講義に窓を見 砂遊び一人つれなく陽にそむき 盛り砂に犬小便をかけて 川の砂朝鮮人に追 鉢卷を三つた左官に砂が 預りはおんなじ 程に砂が 12 T 落 附 10 5 \$ \$ 東 綠之助 新 紅子 Ш 水

裏返す袂に不思議な砂が あ り氣の早い喧嘩に砂はにぎられて

砂に筋入れて別莊

朝

秀

んこする名もいつこ砂に書き

が子たらひの中に光つ て る へるだけ掬ふて見せる砂遊び

なて

砂濱を上手に走る漁

師

0

子

鐘

賀名芽

### 5 ,

有無(一二)歳ひなもの(一三)川柳に手を(二)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住

お馴染の月籍調べな引きつゞき 掲載致しお馴染の月籍調べな引きつゞき 掲載致し

染めた年月

(182) 村 田 周 魚 大阪市南區安堂寺橋四語 安井寬宛

(一)村田泰助(二)周魚(三)鰡坊。二蝶子(四)東京高三三鶉山 五〇三(五)明治二(四)東京高三三鶉山 五〇三(五)明治二(四)東京高三三鶉山 五〇三(五)明治二(四)東京高三三鶉山 五〇三(五)明治二(四)東京高三三鶉山 五〇三(五)明治二十二年十一月(六)新聞記者 七)澤山あり (一)村田泰助(二)周魚(三)鰡坊。二蝶子(四)村田泰助(二)周魚(三)網坊。二蝶子

洞(四)浪速町河原町貳丁目一四五三(五)(一)大石正太郎(二)女久(三)破傘。五鈴(188) 大石 女 久

ステッキの先で砂の上へ太く書き 敬虔な心になつて 砂屋は永字八法知 砂繪書き顔だけかいてじらして 汐風と砂を踏むここで癒へていき 砂ばかりいじつて返事途切れ 砂節ほ 徒らに砂か 砂利船のあはや沈まんばも積み 砂利で喰ふ親子三人川さ 夏 何方じやミ隱居は砂の手を拂 植木鉢砂ほしけれど路次 砂濱で裸のおどる 夜櫻を歸れ 砂煙り満員バスに 何ほでも手から出てく 砂で洗ひました三皿を嗅い出 砂置場一升ほごを おつかさん怒つとるこ砂あは逃り 0) の子供は砂を生かし 砂 6 へ生きてるような砂の ご叩けば 原 なは肩に \$ 暑う 廻 砂 す沙 田 砂 腹 を T 3 ほ te U \$ る砂書屋 干 踏 居 5 0) 紐 2 1: 燒 な 11 τ 3 U 奥 3 Ü ŧ 6 T 6 る ひさし 虚 春公子 穗 風 雨 心波子 一佛 明 仙 羊 天 本 狂

砂 八百長のハッキリ砂を蹴っく負け 洗つて了へば磨砂賣りに 日に砂が這入つたやうに云ふいれ 小供等は歸つて砂が残つ 靴の砂私を出して下 水撒きにあはてゝ逃ける砂遊び 砂ほこり立ちすくませてやい過ぎ **箒目の砂利を先登踏み** し 砂へ字を書いてごちらも 默 砂濱で見上ぐる空は 砂山で子供達者な 砂の山へ母の背から降りたが 砂山にあの人らしい下駄のあ 朝の砂ふみしめふみしめ病上り 向から來るのがわかる砂ほこり **資相撲程經で砂を嚙み當** 盆景へ勿體 あさり籠ごこからこを砂が出 この焼けた砂を平氣 ム眺め砂を承知の腰 2 を見 クリの砂へ監督何か て心動 なけに 聲 砂 < 心で漁師 U 3 を を 男 を ろん 來 τ 出 H 4 T める の子 ħ, 0) る U 6 5 \$ 7 重陽子 時雨郎 桃葉子 同 同 同 志 同 吉 人 郎 舟 峰 女

> 庭球、玉突、散步、讀書(一一 だアれもるないつもりなり天平(八)性的 用屋 もう嫁 明治 新報柳壇水府選へ投句 なんでも食べる。一三)大正六年七月大阪 ご子を四つ(一二)たべものなら、 られないほご未だ初心者 一〇)食道樂、 が好きになつた七年正月頃の日記から、 に富んだこ云ふより理智的の?(九)答へ あつてあれ に廣々三将る戀もあり水府、真ツ裸 の手は絹糸に引つかゝり蚊象、 年 もよし、 月卅日生(六)會社員(七 これもよし、 愚かな妻 職業上 柳

4

J

(184)井 波 俵 兵 衛

ガミモボ(一三)明治四十貳年 きや米でもさがるかい文象(八)古風な女 のつほみ國族を卷いたやう水府、 二五、一〇、一四(六)警察官吏(七 宮(四)石川縣小松町字京町三五(五)明治 九)無一〇)酒を驚曲(一一)有(一二)を 一)井波俵治(二) 俵兵衛(三)馬仙、蛙訪 時鳥啼 う朝顔

)第一生命保險相互會社 八(五)明治參拾參年拾壹月拾九日 四)大阪府 一)石川竹次郎(二)双葉子(三)秋果朗 (185)北河內郡三鄉 石 IJ 双 葉 外務社員 子 村高瀬 E

### 書

郭 陽 選

0

素裸の晝寢へ戸籍 入院をしてから晝寢のクセがっ 晝寢してこよりの こかつた か覺で書寝 機畫寢。 1 稚晝寢をして であつた事を知 髪がゆれてゐる 案もまごまらず 先に操つられ 1= 戾 6 \$ 6 廻 武 天堂 子

晝寢の子剃るのに亭主危ぶまれ 母の愛晝寢い汗をソッミ 日盛ッシート寝人りする啓請 寢 起して断はられ 拭 小屋 \$ 雨郎 郞 秀 鐘

縁側の 晝寢から忙はし 晝寢から覺めて青さが目にしゃ 極樂淨土何も忘れて晝寢 勉强しろミ晝寢 H く晝寢へ午後の陽が廻 向で猫 人は晝寢してるなり 6 E い店え起きてく 吐 6 を な 6 0 3 銀 幸 砂子 明 泉 舟 zk

晝寢からさめて人 晝寢してる

生

考

へ孤兒院荷をひろけ

晝寢から起きて女給の

風出

ほめらむ書寝もならず良い養子

萬 よ朝 し陽 共 選

窮 僧院の 畫 ふかしがすぎると晝寝ひやは 生の晝寢 炸 書寝 な 棋 こ こで晝寝 のかたき討ちに來る へ風 0 3 むか顔 蟬 0 をする女 0 綠之助 重 太 陽子

ゆつくりと晝寢がしたい子澤山 折 枕 角の福を晝寢で 帳書寢の子供邪魔にな て今朝の喧嘩を夢に見る 取 0 節 東狂子 郎

押賣りご知らず晝寢が飛ぶ起き 近 田 のんびり
言
晝寝をしてる
新世常 書寢した口へ銅壺のなまぬる 父うさんの書寢へ小供物足らず 月代のもう一刹に目をさ 働いて居れば書寢がして見たく のくろの晝寢に土瓶取りにく 所 して から書寝を起す用が出 こわれ た髷 ま 來 びん坊 春公子 於 泰 柳坊 笑 天 巫 巫 水

> け有り、一二、曇り空と雨(一三)昭和二年 であれば人妻、 つかに品位を備へ言葉に優しみのあ みをおびて高く常に薄化粧をほごこしど の大丸髷に結ひ上げ身長は五尺一寸位い て生へ際の最も濃き黒髪を東京 五月糸岸町句會出席より 九)目下創作中(一〇)短歌(一一)一人だ 八)年齢は し黑眼勝のまつけの長い鼻筋はやゝ丸 來るのにも女をく 十五才から三十五才までに 妾、仲居にてもよし ŧ ハサドヤ形 S る女

がたりをこもわざのごこたのしめる恐ろ り句品、 しき人(一三)大正十四年 ナシ、一二、高慢、嘘言、鬼ならめあごう 失はない言斷ガールならざる女、 松郎の兩師、 るので一寸困りますが、軽い穿のものよ 舊正月十七日(六)ナシ(七)餘りに澤山あ 縣名東郡上八萬村道原(五)明治三十一年 に結だ下町風(九)ナシ(一〇 より多く致へられてゐる(八)女らしさを へだしたのは最近 )內海常吉(二)休步(三)銀柳(四)德島 (186)生花 藝術味豊かな句、 古遠洲流)ごもに練習中(一一) 山雨樓、 海 休 町二、 十月 この點で路郎 讀書、 莢豆氏の句 眞面目に 桃割れ 0

晝寢から起きる三小供見當らず まだ 寝ます子へ母親の子守唄 母ちやんを抜い書寢の子は遊び 晝寢もうさめて母親呼んでゐる 母の愛晝寢の汗をそつご 拭 晝寢から覺めて職場の暑 むつかしい姑へ晝寢起 裸のまんま寢て晝寢吐ら 本を讀む聲に晝寢の向きを替へ 友達が去んで晝寢は愚痴つてる 不意の容置腰の顔をおかしがり **晝寢もふさめて母親呼んで居る** 夜更かしを晝寢は友へ言わぬか 御主人の晝寢丁稚も眠むっなり 陽の中境めて晝寢 こんなとこ書寝がした瀧 晝寢して夜は寢つかれぬ病 ストライ 晝寢する人の質寢を不思議 寝 する思ひくの場を排び K 峰 晝 寢に暑い計りなり 失業らしい査寢者 キ晝寢の様な日が續 萬 頭 あがり ょ れる 4 0 上り 事 专 L 3 選 か ひさし Æ 穗波子 濁 すみ 仙 郎 峰 仙水 民 水

> 住 子の晝時子守は草をむしらされ 風車晝寢の側でよ 住し晝寢からい陰泣に子が起る 佳)書寢の顏へ惡戯の眼が光り 佳)子の寢息 眞晝の空 氣ふ器 佳)かくれん坊晝寢の脚にこば 坐蒲園の上に晝寝をそっと乗せ のもう一ご剃 りに目をさま < ま わ 6 東狂子 溪 武 柳 秀 子 水 笑

晝寢へは知らぬ素振の 青葉陰そよくくう三夢になり 結構な身分畫寢へ御 繃帶がずる<br />
~ゆるむ<br />
晝寢なり ごんな夢見たのか晝寢笑つてる (佳)あんなミこへ新聞散
に晝寢 扇風機畫寢の鬢がゆれてる 日盛りを一と寢入りる骨譜小屋 (佳) 晝寢の天井に池の陽が映る 足の晝寢へ風のあり餘り 簾 煽風 動 機 3 \$ 維茂介 廻天堂 溪 寂 同 柳 郎 郎 水 秀

本舗

御 匂ひ入り 打

重がぜ

到る所の葉店化粧品店に販賣す 發賣 伊 麙 橋 大 盛 大 堂 堂

橫

を見せて晝寢の人こなり

風柳坊 重陽子

天)空想へころく書寢落時か

窮屈なごこで<br />
晝寢をする

合宿の 夕立のしぶき晝寢の顔 人)手が すべり落ち 晝寢驚く 壇 畫寢 へ晝寢うつかり足を向け 或 は 壁 を 散 蹶 0 b 孤 時 雨郎 舟 水

晝寢するだけに 座蒲園を二ツに折つて晝寢なり 夜更しが過ぎるこ晝寝ひやか。<sub>な</sub> 晝寢時將棋のかたき打ちに來る 枕だけ提けて 晝度 **晝寢から覺めてのこく**話し お電話に立つて晝寢はそれつり 佳 晝寝な見めて青い目にしる 晝寢した顔を洗へば帶がと 版は 室を換へ 綠之助 仰 眠島 同 銀 幸耿 砂子 聲村

公休日食事に起きただけの事 虚 白(住)きれく な夢に晝寝は贈る 町 二晝寢起きぢつこ小さい庭を見る 曹 天晝寢中弟子は鉋を 研 ぎ 通 し 嘉 峰豊寒中弟子は鉋を 研 ぎ 通し 嘉 峰

野良 晝寢もう起きねばならぬ (佳) 晝寢から覺で職場の暑い 集金へ慣ら 今晝寢です 公休日食事に起きただけ 佳 地 )重心が抜けた氣味。。晝寝 むつかに姑え晝寢起き上 へまで晝寢のだるさで來る 兵午 ٤ L < 集 時間を洗つてる T. 金 0 用が 箱 6 to 事 7 耙 0 町 民 卓 水

### 川柳書架(#こ

### 川柳禮讃

大谷五花村夢

一冊にし樣ご思つてゐたが單純な、句集傳の意味から、古川柳の名句を集めて、し續けてはゐるが、此以前より、三柳宜と雜誌の發刋を思ひ立つて、其儘月刋三る雜誌の發刋を思ひ立つて、其儘月刋三人著者の「川柳禮讚出版に付て」から拔く

編では讀者の飽きもあるし、又、其等の

今天谷五花日 六頁。 他 集めたのが此本である以下略) 讃嘲したものを讀者本位で行こふご書き 畑を違はせて、 事も先輩が大分やつてゐる事故、いつそと云つて、評釋を眞向ふからするこいふ △昭和三年五月二 大谷丘花村氏の古句評釋が主で、 定價金壹圓。 や旅行記なごがある。 東北川柳會。 評解でも、解釋てもない 十日發行。三五版二六 發行所福島縣白 そ 河 町 0



合 舟

JII

長い長い青柳橋、 汲江の傘帆なに一つき



して土佐の情緒を出してゐないものはな

に在りし日の英雄の偲げをしのぶ。

稻荷新地から家形船で浦戸灣を巡る。

お馴染の山内一

豊公の靈を祭

がる藤並神社

の人板垣退助伯の銅像や小學讀本で

高知新聞社を訪問し土居旅館にほご嬉しく思つたここはない。

土居旅館に落着き、

自動車で

答案を教はつて始 濁水氏が一番強い。

めたが先生だけあつて

此為

がら中澤濁水氏が出迎へて下さる、

川柳雑誌の五月號を高くふりかざし

日岩

へ三三里の波路を徐行しはじめたのは翌 は浦戸の咽喉を通つて土佐の胃袋高知市

に陷没した三言はれる工佐灣から汽船

山から土佐通ひの

汽船に乗る。 新水の兩君

一夜™の

Ŧì

月系

十五日翠峰

石言私は天

の正午前南風に薫る兩岸の風光は日本

のものでない。

何だが南洋へでも來たや

うな感じがする。

小憩後高知公園

(元の高知城趾)

に登り

濁水氏の勸め上手に下戸 色になら。夕陽西に落ち頃陸の人こなり 土佐の高知の播靡屋橋で 珍味を前に盃 が交さ の新水君迄が櫻 れる。 酒の人で

土佐の俗謠を聞かせてくれる 美妓傍らにあつて豐かな肉聲を震はして の明治 真樓に登つて濁水氏を共に句會を開 れてるる高知の心齊橋は此のあたり。 はなくて木煉瓦の鋪道に電車線路が わしのトチイは浦 見送つて一人で贈る長い 惜別のはつ 家形船この 家形船壜が轉んで、唄 で名高い播摩屋橋を通る今はもう 坊さんかんざし買ふた見た 雨にしょ きり言つた積なり 川 下に灯がさもり んぽり鰹 戸の沖で にな 舟新翠濁 100 敷か 橋也 大意 水峰水

の句をしみじみご味はつた。

(寫眞は向

,

室戸岬に赴く経景を前に路即先生 平洋に面して僕は莫加でした

翌日濁水氏に別れ自動車で日本

景の

つて右より新水、

舟々、濁水、



## 評柳釋樽

# 四篇までは

# ル 篇 ま て

二篇の句(鞭き)

もし伊勢 こ思ふが親のちから草」の五文字がぐ即ち頼りこする意味であるが、此の『ちから草」である。若しかするこ伊勢へ扱語りしたのではなからうか。かごはかされて、遠いこころへやられてゐるのではなからうか。かごはかされて、遠いこころへやられてゐるのではなからうか。かごはかされて、遠いこころへやられてゐるのではなからうか。かごはかされて、遠いこころへやられてゐるのではなからうかこいろく〉案ではするが、そこが親心である。若しかするこ伊勢へ扱語りしたのではなからうか。かごはかされて、遠いこころへやられてゐるのではなからうかこいろく〉案ではするが、そこが親心である。若しかするこぞが記憶のこいふのは、少年なごが親にも、勤め先へも話さずに伊勢一変にない。「ちから草」である。『ちから草』である。『ちから草』である。『ちから草』である。『ちから草』の五文字がぐ即ち頼りこする意味であるが、此の『ちから草』の五文字がぐ即ち頼りこする意味であるが、此の『ちから草』の五文字がぐいまいのは、少年なごが説にも、動め先へも話さずに伊勢一変にない。「ちから草」は、ちからこする種、おいの『ちから草』の五文字がぐいた。

用意園到さを味ばなければならぬ。『ちから草』 三同様の手法門意園到さを味ばなければならぬ。『ちから草』 三同様の手法

用意園到さを味はなければならぬ。『ちから草』三同樹の手法は、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。は、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。ば、いや味であるが巧に用ひれば、何を活かす力がある。が迷ひ子になつた。子ほんのうの親でなくこも、いつか歸つて來るだらうなごこさうのんきには構へてゐられない。『迷ひ子來るだらうなごこさうのんきには構へてゐられない。『迷ひ子來るだらうなごこさうのんきには構へてゐられない。『迷ひ子來るだらうなごこさうのんきには構へてゐられない。『迷ひ子亦あだらうなごこさうのんきには構べてゐられない。『迷ひ子が迷ひ子になつた。子ほんのうの親でなくこも、いつか歸つて來るだらうなごこさうのんきには構へてゐられない。『迷ひ子が迷ひ子になつた。子ほんのうの親でなくこも、いつか歸つれた、禮をいひこ字つたのである。その情景をかなり時間的にれた、禮をいひこ字つたのである。その情景をかなり時間的にいたのでゐるのも一願に價する。

産んだ乳のあてくらをする長

気の中に閉びこめられた女性達であるから、爛れるはまない本能をそなへたませまままままままま。 爛れるは 張り本能をそなへた女性であり殊に一夫多妻の淫靡な大奥の空は、はいかし、奥女中さしも大に接觸するここをゆるされなかつた。しかし、奥女中さしも大に接觸するここをゆるされなかつた。しかし、奥女中さしも大きない 女中は最高級の上萠年寄でも、最下級の御半下でも絶對に異性をできた。それ等、御半下ミいふ席次にわかれてゐた。それ等の奥なる番、使者、御半下ミいふ席次にわかれてゐた。それ等の奥な社等頭、御祐筆、吳服之間、御座敷、御三之間、火之番、御一灣の歌、神三人間、火之番、神一灣の歌、 があつて上臈年寄、 ここである。 想像にかたく 乳たこか、産まない乳だこか、あてくらをしたりすること位は んだ女もるたのであらう。 さい S 0 ない。そこを勢つた何である。が、詩三しての價 御殿者言か、 ひこしく奥女中ご云つても、 御にいる お互が寄つては誰それさんは産んだ おくちょうう 間、御座敷、御客會釋、 お局さんこかよば 御門稿 爛れるほごの いろり 御蛇口、表使物の階級 かに子を産 性的

牛かたのあきらめてゆくにわか雨は尠い。

穿つたのである。 ないではらくと、このである。 ないではらくと、このでは、それをよく知つてるた。だから濡れるにまかばらくと、この雨が來た。が、鈍重な牛の歩みにかはりはなかばらくと、この雨が來た。が、鈍重な牛の歩みにかはりはなか

## 艺三

は明和五年に刊行されたものである。次に其序文を掲げておく柳樽中、最も佳句に富んでゐるこ云はれてゐる誹風柳多留三篇

三篇さはなりねと書扱き、初篇に述べしごこく題を略して、誹風屋那支多留を書扱き、初篇に述べしごこく題を略して、誹風屋那支多留川叟明和元年申年の頃秀逸の中より、誹かいにひとしき句體

明和五の孟秋吉辰

## (七)三篇の句

除はむごつたらしい藏をたて

仲條については老婆心話の二卷に

くおもふなり 戸町中に仲條流幾ばくありや、 に蹴ころさるゝ圖など示されけり。此外國々にあるべきなり。 男は育するこいへごも、三子あたりよりは多くはまびくさて、 見などの遊びたること至てまれなり。 是れは國風にて嫡子より二 ふべし。 余上州邊を遊歴なせしに隠橋など夕方見渡すに街中の小 中尤も禁ぜられたきものなり。町々張札など殊に見苦敷きここ駅 看板掛け置き専ら子なおろすここのみな近來樂さする者多し。 仲條流さいへるは婦人科の療治の様におもひしに、 候の領分預り地にて、 也。常州總州野州邊は殊に甚しさ聞く。先年山本北山先生、佐竹 を得る者其子を愛せざらんや。 産すれば直に膝下に加へてしきて殺すさなり。 ささされたり。其本たさへば親に不孝、 専ら悪風を除き度、 此風俗つさめて停止なしたきこと 其業の人をおもひやればおそるし 叉子 をまびく者は 天道機 假名書き繪本などにて 畜獣さいへごも生

心得を以 右體の看板取入候樣に被仰附度候闢邊も置候を天保十々の內、月水早流に申す看板を掛候もの有之、如何敷候間、 名主

三年壬寅五月被仰出候、先々老婆心話に如此に候處此度之御政事

こ送して漸く禁止したのである。これを見るこ日本にも古くか こある。更に同年(天保十三年)十一月朔日に ・ 姙娠之者を賴に應じ預り置、墮胎致させ候類も有之哉に相聞不屬 市中女醫者
こ唱候者、血道の療治正敷致候は不苦候處、其中には 此旨兼而可存候 向後右様之儀於相聞は、 賴人迄も逐一遂穿鑿急度告可

ら産見制限が行はれてるたここがわかる。

こうに掲けた何以外に、仲條を詠んだ何は澤山あるけれごも

何れも穿ちを上きして非詩的である。

まな板をたばこの時にけづらせる

穿ちの句。大工を詠んだ句では間じ三篇に、 一寸まな板をけづつてくださいませんか』こいふごころである 大工が煙草休みをしてゐる。そこをめがけて『すみませんが

かんな屑かみく大工ご いで居 る

くない。同じ穿ちの句でも人の意表に出た所に面白味がある。 ねばならない。お經を讀みならふだけでないここは想像にかた る。しかし、そんな嫁は、嫁の方から姑の方に同化されてゆか ではないこさが知られる。中には仲のよい嫁こ站もあるのであ こいふのがある。これは寫生何。 嫁こ姑は中のわるいものごきめられてゐるが、必ずしもさう よめは お經 をよみならい

時に何ン

のなら、折角の仲人の苦心も水の泡こなるので、斯くはいましこが知れる。 盃の時にうつかり馴れくしい口でも利かうも めたのである。 この句を一讀するこ、花嫁ご花婚か既にくいゝ仲であるこ

捨子のま たを あけて見る

『女の子かしら、男の子かしら』さいひながら、 チェッ、又捨子か』こ夜廻りは舌うちをした。 拍子木で捨子

江戸時代の情調がよく出てゐる。の股をあけて見た。

總社舞によばれてゆく人たちの華やかさに、引きかへて、 舞わづらふ禿またが れ

てゐる。この句から、死の涙を見遁してはならない。 わづらつてるる元のひこり取りのこされてるる寂しさがよく出 大三十日首でも取つて來る氣 也

ふが、大三十日ばかりは外の月とは遠ふ。是非こも受取って來いつも、氣が弱くて、近に明した。 こりにゆく大三十日』 こ射照して味はふべき句。 いつも、氣が弱くて、泣き言を言はれゝば、それもさうかさ思 竹はまけて來

める。巧な寫生句である。 

る時屑を替へ

風鈴もならぬ真檻のむしあつさに、いこし子は、すや・くこ 物さしでひる ねの 蠅 を 追 つてや

母性愛の横溢した句だ。 又しても、たかつて來、蠅をものさしで追つてやるのである。 ひる腰の夢をむさほつてゐる。傍で針仕事をしてゐる母親は、

のよくの檻をだに もゑりかへし

ある。今でもよく見かける圖だ。 たつた一文か二文の概をゑりかへす心に人間のあさましさが

ここづかる文でほうなどなでて見

う男は、ごんない、日に生れた果報者だらう。あやかりたいも のだ三女で頼をなでたのである。 戀文をここづかつた男が、こんな美しい女から文なんかもら

に同情した句で、叙法も巧だ。 る。古句の多くは醫者を罵倒してゐるが此の句は珍らしく醫者 をたゝきたがるものだ。それを醫者の立場から辯護した句であ 樂禮もせぬくせに、あいつは藪だの竹の子だの三云つて悪口 もせぬくせに藪醫のなんのかの

きパツミ雀等がこび立つ。それが娘い子ざもにきつては一つの よろこびなのである。 秋の情景をそへらものは鳴子である。鳴子がからくて鳴る 鳴子引き子の愛相に一つ ひ

田舍らしさのよく出た句だ。 もなごがやつて來たので、愛相に一つ引いてやつたのである。 下男なごが出圃へ出て鳴子引きをしてゐる時に、主人の子ご あいにく こいひく 飯をかりに來る

> 來て、飯が足りないこ云つては借りにくる。中流以下のころろ やすい仲ではちよい見くかける圖だ。家庭スケッチの句。 あいにく、醬油屋が來ない三云っては借りに來る。不意に客が 女房をこわがるやつは金が出

に、金の出來るのも無理はない。 しの金をつかはぬき意張つた江戸ッチを逆に行った御亭主だけ 人口に膾炙した句で句意を説明するまでもなからう。智越

が非常によく利いてるる。 すのを穿つた句である。この場合、『もうはなし一の『もう』 れてゐる。まだ夫さは馴染が薄い譯であるが、それだのに、もでは結婚してから三十目に第二条語るので一般に三日歸り三呼ばては結婚してから三十日に第二条語るので一般に三日歸り三呼ば う夫びいきに、うちの人がごうだこか斯うだこか夫びいきに話 里歸りは、婚禮がすんで間もなく里へ歸らここで、大阪なご **里歸り夫びいきにもうは** 

ちので斯くは詠まれたのである。一寸した滑稽味を捉へたまで 物屋ばかりは、がらくしいしやんこ、こわれる音ですぐに知れ いある。 外の商賣であれば損をしたのが直接は間へは知れぬが、瀬戸 そん金の世間へ知れるせご物屋

だ。似法さいひ、調子さいひ、なかく巧な句だ。 である、お内儀の悋氣が婉曲に毒を吐かせんさしてゐるこころ旦那のお供をして、古原へ行つた店の者が詮議されてゐるのはない。

こぶ やうな舟であらふ 三問

平家物語

は祗園女御、

胡宮神社文叢は女

てるな

記は兵衛佐局とし、

蛭 子 省

## 零餘 子蔓 は びこる二十餘 年

狂

は鷄卵 零除子はム 000 あ いもの子其蔓の繋の 0) 如言 < カゴミ讀み古 小さきは鉛丸の如 間に生ず形大なる スタカ į ゴ やいまり

これは山の芋鰻になるの もある『いまだ生もかへぬうちに、 外にも山の芋を浦焼にする の大將のき、 いかごから蒲焼までの浮苦 そり や山の芋を蒲焼に 諺に因つたも 勞 ご云ふ

云ふので 句意は平家の天下も二十餘年であつたこ するやうな』(本朝二十四孝) 清盛は忠盛の子。母がわかつ

> 本できっ た折り、 御っの りこりてやしなひにせよ」こ仰せられた にけれ」こ申上げにれば、 くそこをねらつて居る。史實には疑問 の御落胤さして傳へら にいもがぬか子もなりにけり こつて「 されて居る。上皇が熊野へ御幸遊ばさ (此の歌の上が源平盛衰記などには「這ふ程 h, 食ひかけの芋を忠盛拜領し 龍遇を厚く 総毘山を越し給ふ時に零除子を こなつて居る。 いもが子は違ふはごにこそなり 業つてるた忠盛從ひ れ そして白河法皇 院は「だだも 川柳子もこ 悉 n 3

清盛 夜啼きすを院が聞し召されて。 外に挿話があ 盛こ名づけら 0 の呪に此歌を書いて壁に貼る事があ 御製を游ばしたら啼き止むだので。清 きょくさかふる事もこそあれ夜なきすごただもりたてよ来の 院の子院の子で忠盛は抱き上げる の名は熊野權現の御記宣、云 3 れた、 祗園女御の生 それで今でも夜啼止 め ム説 る見が

するは悪き神を吠い追退くる學びなるゆ

へり。

此る場で

今も神の社の前に抱魔犬を置く事もいまする。 なん これ これ これ

より事起る也。今の犬張子も流人

院の子 や端午に、犬張子が飾つてある理由 ンノコ犬の子の いんのこ いんのこ 趙雲たたきあひ は白河上皇の子三云ふ意味三、 謂が含まれて、居る。雖祭

手を拍き歌ひ舞ふ事あり、 らを離れず、吠ろ狗の真似してつかふまり、ちゃいふて、常に天皇の宮脇のかたは 成て仕へ申さんう誓ひ給 退け災異を拂ふ誓ひの物也、 あり、是も神代より事發こりて、悪魔を 本武尊吾妻鑑) つるもの也これを忌部正通の説に大嘗會 ばざる事をしりて、我子孫のもの隼人こ 酢芹命、御弟 彦火々出見尊の御徳に及れるかない。 おまかれる 調度の敷々なる其中に、 き撫で摩り、 いふの神代の遺風なりこい の日あまたの臣下禁裏に入る時、 『ちやつご剣を袖に入れ、 そらさぬ館も赤らめり(日 引用例は澤山ある「雕の 犬張子こいふ物 ふの此年人は狗 これを指げる いんの子く 其始めは火 此年人

6 0 ならの神祝なり」(雛遊の記) 玉ぎょ事ある時。狗の子く〜こ唱侍るなれば也、又今の世までも小兒のおびなれば也、又今の世までも小兒のおび を排 ひ災害 をし 犬の形容をう りぞくる神 こするは、 代の傳 へも

## 茶筌うり子も七墓を覺け ij

(武川玉六ペン)

梅田、小橋、葭原、飛田、高津の七 他國にも例はある、大阪では長柄、 地域にも例はある、大阪では長柄、 はなり、 はなりで、大阪部りで はなりで、大阪部りで はなりで、大阪部りで 『私は七墓のぐりの坊主ざやが』 こあるできょう に致しません。お手元 で御調査の詳 に致しません。お手元 で御調査の詳 に致しません。お手元 で御調査の書を大阪事情にうこい私は、七墓巡りの事を大阪事情にうこい私は、七墓巡りの事を大阪事情にうこい私は、七墓巡りの事を そうです。陰暦七月十六日から最終の寺 三味線太皷で七ケ寺を 大阪では長柄、 りの事を狂 でなく が所が柄

で、此の際記す事。 同稿が編輯の都 かざす鷹の羽の袖」がある。 一也寺は茶筌の屑で蚊をいぶし一也寺のゐみりに竹の削屑

合で中断されて居るのべるつもりであつたが

で

たが。

を巡り

つたこも聞く。

賣の

は拙稿

「生業の古川柳」

め申を 親なし切まて 三を記 ます。 する川柳は引用された、 彗星一月號に は引用されて 御一讀をお動 松本龜松氏が は疑問を有 てないから

茶筌賣くうやくはすの細元手(狂)野郎が坊主かわからぬは茶筌賣 句

瓦礫雑考に、茶筅の 略)常は杖の先に茶筅をさし。大路小路合ても飄ふ。其唱歌は卒也の作なり(中ないたと)には、これでは、まままでは、まままでは、まままでは、まままでは、まままでは、まままでは、ままでは、ままでは、ままでは、 れで、うは帶した らは皆僧俗二中いもの あひだに鉢 2 一かり nn 殿云 茶筅をけづりてい だにも流 十二日空也忌、 十二日空也忌、四條坊門西洞院のしき服なり。こある。柳季記に『 三一派ありごや」 かれが修行は瓢箪 たたきの寺あ n うりが着たるも十徳な あ りて、衣の紋 こなみごすっ なれば、 6 鉢たたきは をならし、 心に鷹の 山北科

> だ見出されは物足りない。 三三聲 是江戸の茶筅賣をい こ云ふねらひ處、例 < はよばぬ玉子賣」 一聲うら ひし也の一 へば古川柳の「一聲 のやうなのが未 殊に淺草でう 二峰賣らぬ

月酉の市 識が明 こする故也。寛政に至り自ら廢之、茶筌 て茶れ 日には賣つたそうで「昔は今日境内に於い の形象の は今日のみ賣之しなり。 つた句が得ら 身門内の楊枝店ニー戸 青竹茶筌 みに 0 とうる、是昔は中日も挽茶を専用 (守貞漫稿) にて 如言 して極い く精製の物に非ず、唯茶筅 商人のうる物が、 れない。 こうの学 めて粗製也。 アのみ古風和製の筌で相製也。今世も隨て相製也。今世も隨 七月十日四萬六 又 滞花漫筆に、 右の茶筌今世茶 熊手 今月焼土

切餅等こま 乍ら質疑句の意味は窺へ す。 風俗文選に風俗は してあ 华日閑話 30 の空也僧鉢敲考に諸書から 3 to L るように存じま 13 以上で大略

前句を採りたい

前句の擬人法不成功なり、

よくある圖

なれご古い匂ひが強

4;

想計

のものが動く

やうなり、後句中七も古し

## 紋 太

作者名は省略する。(六月號参照) 借用幾重にもお発しを顧っておく。 に隣合はせた二句を抽き出して來る。 句宛組合せて對照的に句を味はつて見や 主に對して甚だ非禮だろは思つたが無断に うこいふ考へを起す。材料は本誌六月號 「各地柳壇」の中の同題から手當り次第 かすると叱られるかもしれぬ きな男あり。 頼まれもせぬに(若 一題に 態等

肉味に活きた句。 後旬中七の調子大いに働く。詩味より皮を質ない。●前句概括的に云つては面白味なし、●だくがきに **給継ふ女へ桃** 小包の給にしては 重す 前句小包重すぎるが主體だから給で 0: ほころびる きる

巧さが目につく。 後句る止め餘情に乏し。 も單衣でもよい感がある。後句取合せの ◆前句中七八敘し方があわて 繪日傘が大きく避 ける 宗次馬について懐 手 馊手 過きる。

専門の外に隨筆 なども書け

専門家些 細 な事が氣になつて

ミ下五の積きが悪い。但し湯上りの爪ミ

してはおこなしくなつて不可、この儘

前句我等が常によく見る圖、

後旬も

がなり止めはあつさり過ぎる。

◆前句恐ろしさうにの直叙

はゆるせる 後句中七

下の長い日那かはつきりする三面白いの

前句一寸した動作。後句子供か鼻の

湯上りのおさなしく爪切らすなり 切った爪恐ろしさうに捨てるなり

椙

思へる。 も同断なれご如何にもありさうなここに では前句の方無難の ◆前句事件を態こ拵へたやうだ、 調査さは名ばかり山の温泉にひたり 調査しに來た役人も同情

後句

もあるまい。後句、 暴露してるら様だ。真逆か不慮の慘事でなる前句、分けては誇張が過ぎる。柩がかれる。 この頃流行らぬ句風なり。 犬の子にアスファルトなご頼りなし 八通り分 けて 柩の白さなり 八通り姉の日傘が派 手 すぎる 佐犬に得意になって引づられ 姉こあらが働かず。

題詠さして巧な句、 意を用るず素直にありたし。 面白し、慌、 ●前句、中七嫌な見方。後句思ひ遣り 蝶々へつられたやうに追って行き 蝶々へ仰向 前句何處か幼稚なごこがある、 しい街頭も思はれての けになる肩 その巧さが嫌なり、 後句

きにあらず。 少し勝る。共に輕き句にて多くを望むべき き ▼共に素直な點を認める。前句の方が

すべい。 まくある叙法なれざこの句味はひなり、よくある叙法なれざこの句味はひなり、よくある叙法なれざこの句味はひなり、よくある叙法なれざこの句味はひなり、よくある叙法なれざこの句味はひなり、よくある叙法ない借りるだけ借りてゐる

太功記湯槽の椽を 叩 い て ゐ湯に來れば僕より痩せた者もゐる

◆前句上五に一巻を要するが一面の面と はお一層平凡にしてゐる。 共に男湯の題と とが一層平凡にしてゐる。 共に男湯の題と とが一層平凡にしてゐる。 共に男湯の題と を消化してゐない。

つてゐる如し、待たされてもこあるべきをありたし。後句うれしさの消へるを待きありたし。後句うれしさの消へるを待まてざ待でざもうれしさの消へるを待まるけん。

●前句何こなく葉櫻らしき句、草臥れ葉櫻の下で遠乗り 風 を 入 れ葉櫻へ脱いだ足袋から草臥れる

た感じがあるが、足袋からご具象化され

●共二夜光沙する者の心理を捉へたる を動け者石につますく心持 を逃げ者石につますく心持 を逃げ者石につますく心持 を逃げ者石につますく心持 を逃げ者石につますく心持 を逃げ者石につますく心持 で逃げ者石につますく心持

●共に夜逃げする者の心理を捉へたる。 様な取材になるものなり、前句中七生炭 様な取材になるものなり、前句中七生炭 様な取材になるものなり、前句中七生炭 様な取材になるものなり、前句中七生炭 様な取材になるものなり、前句中七生炭 様な取材になるものなり、前句中七生炭 を 本がなる。後句おこなしき見方、夜逃け者 はよい意味で可笑しい言葉共に未成品か 自粉に浮身をやつす身分なり 電車中人目おくせの刷毛使ひ

青年團色の白いがあさ に なり後句吳服屋の店頭か嫌なり。

る。何の相談にや漠然たり。
■ 長 を 中 に 相 談出來上り
■ 長 を 中 に 相 談出來上り

島一羽あそびはぐれて暮かゝり もう少し飛べる筈ださ、鶏 思ひ

◆前句可笑しかるべき筈が左程になき ◆前句可笑しかるべきといた程になき なからか内容より叙法が面白さうなり。 後句あそびほうけて或は歸りはぐれてこ あるべきか。情景よろしきも非凡ならず あるべきか。情景よろしきも非凡ならず あるべきか。情景よろしきも非凡ならず あらべきか。情景よろしきも非凡ならず あらべきか。情景よろしきも非凡ならず あらべきか。情景よろしきも非凡ならず あらべきか。情景よろしきも非凡ならず あった感あり、作者に不平があらう 話を焼いた感あり、作者に不平があらう が平にお赦し下され。評の適不適は私に も判らぬから……優劣を付けるつもりだ。

\ \ \

本降になつて新 柄 又 出 させ本降りになつたさ窓へあきらめる

0

時

又なの間なしい 通流 のての 使い語っし め 不思議だこも間違いだこ ●かも變流 違い人がおいて 言葉から 1 b ・氏の所謂僕及び世間の遅ひだこも間違いだこも不思議こも成となった。 はない ないから たいかん 6) は 度を度さい 5元 間・々(御)・なな違い間・往・然いひき診・し理 を作って は丁度鄙の人 をいの た言言 理。 一层 である。 居る如くるかその 御湯人だい 12 で居る為めいます! 生きて居る 然期次 5 感じら も、僕では、 し如何に混った。 はは、世世 病 して il 6 3 恥ばが 後はそ 等地で ないい か 1 から 10 0) 3 在診を見送って被太氏の

0

T

-00

 $\neg$ 

往き

(1)

2

C He

8 可》「

あ T

1

言いる法院成成の して居る者で 居 る E 0 T 言葉が 2 41 ては僕 6 であ 0 とは僕は大いである。而 說 あ 而好的 滏 \$ ちそ ts U U 疑問にあ 6 きす Č 0)

本

L

3

句

して

答・整・い・た だ・つ・た・。 た・句・若 な 0) 3 た・句・若・拔り句 自然分が、 10 句 ものはのしのい 7. ちよ の・皆・そ・たな・の・句 あ 0 40 も物: 10 を は から たから たから に入つた句ははいのであた。 了・遠・皮・ミレマー で・も・で・て 

ご言ふ文章 散えれ 彼れ to 3 從はない 三六 持。 か 0 K 3 文"替 0

る時が数は になれば、 はなれば、 なれば、 ろを から 0 n 1 過人で 前題に往の 診 で はあ 7 る ラ 者。成"出" 6 即がを変えている。 10 少し ブで球を撞 つて 40 41 to で得ない。 然し常にはなる。 それに時に は時には社談の階 して何等の差支もな では大いの句 で素人氏の句 で素人氏の句 から 句的 見た時発 然し實際 然し實際 三豆とも 上る計釋を附 とこの句 0 8 宇後 頁。有 1 1 5 句《 8 3 9 0 附けら 人;區、 間別 句な 3 な田道



好

革

郎

は君の人格を疑った。僕の信じる牛文錢君は ふ事を知り意外の感に打たれた。 文を讀んで君が全然路郎君を 知らないさい く知つてゐる筈ださ思つて居たのにあの一 あり、又僕よりは君の方が路郎君の性格をよ 於ても、僕よりは君と路郎君さの方が密接で そして川柳さいふもので 結ばしてゐる點に 郎君さの仲は、僕き路郎君さの仲よりも古い 僕はどんなに悲しかつたか知れない。君己路 つて書かれたので、矢張り君ださ分つた時に つた「五月號を讀んだ時には」然し二回に耳 君の名を借用して 故意に書かれたものさ思 あんな文章を書く人でない
を思つた。誰から 郎君に關する記事があつた、之れを讀んで僕 れた「感想三題」及び「柳壇縱横」の二文中路 半文錢君、君が「影像」の五、六月號に書か

> 私はこの間ある句會で 白粉を落せば淋じからんに

に「Aよりしまで」の中で

した楊柳の創刊號(大正八年六月一日發行) ではないかき思ふ。そして松窓君が君も關係 あるこの二人な一緒に論じるのは少し こ路郎君さは全然性格も 句風も違つた人で 一緒に論じてゐるが、僕の知つてゐる松窓君

した なかつたかさ思つて 見る氣になつて來ま 頁から繰つて見るさ果してあつた。それが 少ない。「雪」ではあるまいかき思ふて第一 なかつた私 には從つて眼に觸れる雜誌も た。そして「紙衣」の次號へ出すつもり は出さずにノートに書きつけて 歸りまし さいふ句を作つてい」句ださ思つて、會で なして居ましたが、フト何かにこんな句が 近年餘り川柳ミ近づきになって居

> は聊か恐縮しました。路郎君の 殆んご同じ句で路郎君の作 であつたのに

白粉を洗ひ落せば淋しからんに 製せし人々に

ない、これは全く私の頭の何所かに三年の路郎君にこんな句があるこすれば仕方がの、それは愚痴にすぎませぬ三年も前に の句の氣分も違つて居れば、場合も違つて 出して來たので お恥かしい次第でありま 足になつて仕舞ふと理屈は言つて 見るも はいけない、私の場合に洗ひさいふ事は蛇 ゐる。路郎君の場合は洗ひ落せばでなくて す。然も作つた時には全く好い氣分でした 間コピリついて居たのが何かの いてよかつた。勿論路郎君の句の氣分ミ私 で僅に洗ひの二字が多いだけです、氣がつ

0

君は「感想三題」中で路郎君さ松窓君さん

づかす、休火山狀態にある松窓君さ、一の主居られるだらうさ思はれる。其後も川柳に近 は餘りに二人を知らな くたにして僕達の畑から見棄てら れたくな らうが)であらうが、齋藤松窓君も苦笑して 迷惑へ路郎君は笑つて問題にはしてゐないだ ぢゃないか<br />
ご<br />
れでは<br />
路郎君も は絶にず川柳のみに生きてゐる人この二人 てゐるこさもあるまいさ思はれる。同じ句を の君のこさであるから、よもやお忘れになつ だから、讃まれない事はなからうと博覧强記 を一緒に論じるこさは 無理さ云ふより亂暴 そして一方は餘り川柳に近づかない人、一方 作っても氣分も違へば場合も違ふ人である。 さいふ君の好意(?)は僕には分るが、それ 主張を持って闘つてゐる 路郎君さを一緒 書いて居る。これは君も關係して居 過ぎるさいふもので れれ雑誌

0

はなからうか。

社會進出の為めに、あらゆる犠牲を拂つてるの第一着手さして川柳雑誌を主宰し、川柳の第一着手さして川柳雑誌を主宰し、川柳の前、短歌よりも、俳句よりも、より以上に川相が、短歌よりも、俳句よりも、まり以上に川相が、短歌よりも、俳句よりも、より以上に川相が、短歌よりも、俳句よりも、より以上に川相が、短歌よりも、俳句よりも、より以上に川相が、短歌よりも、俳一ないの、一般ないの、一般ない。

ることは、よもや君が知らない筈はないこ思

を作り、あるでは高温に表生ながって を取者が川柳雑誌に書いた「三十年計画」 路郎君が川柳雑誌に書いた「三十年計画」 を選んだ者は、決してそれが一つの空想である。は思はない。過去に於ける路郎君が一方自己の藝術の完成に努力し、他 5川柳の社會 進出の為めに路の遠きなもいこはず、東に西 に眠さへあれば宣傳旅行なしてゐる その努 力を見て、その三十年計畫は單なる空想でな 力を見て、その三十年計畫は單なる空想でな な、此人の力に依つてこそ始めてこが完成さ れるものである。君は路は君が口の層を指して名を想でな である。君は路はない。過去に於ける路郎君が一方 自己の藝術の完成に努力し、他 5川柳の社會 は此の方に依つてこそ始めてこが完成さ れるものである。君は路郎君の何處を指して之を否 のである。君は路郎君の何處を指して之を否

信

心をはじめたる母にも可哀さうだ

定するのか、それが聞きたい。

0

熊のため海鼠になったおそろしさ

同川柳雜誌三月號の「ロンドンの一周忌に」 俺は彼を莫迦 に し て や ら う

お父さんの戸経衰弱がわかるかいお父さんはやはり川柳々々さ云に

妥協した跡が見へるのか。 などか讃んで 何處に經濟的にも藝術的にも

0

次に「柳壇縱横」の中に「久良岐で路郎」で

題して「川柳三味」の記念特輯號に が、若しそうでないことてみれば、路郎君 だった。恐らく三は二の誤植だらうと思ふ 君のが三十幾年であつたのは少こし 意外 久良岐翁の川柳生活が二十五年で、

路郎

3

わけだ呵々」さ

は久良岐翁や劔花坊氏からも 大先輩

あつたことは 君が川柳雜誌第三卷七月號に 治復興は明治一十七八年の日露戦争當時で の十歳時代は、明治三十年である。川柳の明 郎君が如何に神童であつたさしても、路郎君 るさすれば十歳以下の子供時代でないか、**路** 成區役所へ行つて戸籍係りで 調べて見たま 號に石賀馬行君が書いた「戸籍調餘談」を讀 ない知らないこ云ふなら 川柳雑誌本年一月 書いてゐるが、君が四十歳で、 へ、四十一歳で三十幾年も川柳生活をしてゐ んで見たまへ、それで得心が行かなければ西 一 戯であるこさはよもや君が 知らない答は いた「忘れ得の事ごも」の中に 路郎君が四十

毎日(「浪花樽」さ稱した時事狂句が二 特異な威力を放つてゐた。その大阪日報に な社長吉弘白眼氏の手腕で 赤新聞さして りにした小型なものであつたが、經營上手 阪日報と稱して紙面も 新聞一頁を二枚折 れてゐる閼西日報は、二昔前のその頃は大 あつた。今、大阪の淀屋橋附近から發刊さ その頃、明治州七八年の日露戦争當時で

> も今日の路郎氏な 偲ばすやうに賑やかな つてゐる(中略) 路郎氏は初めての會合での金釦の學生姿もぼつかりさ 浮き出て殘 ごにお眼にかゝる事を得た(中略)路郎氏 略)堀江の繁榮橋南詰のせごや旅館で第 印象を貽してゐた 軒き號す)脈生路即氏(當時天涯を號す)な 回が開かれたその席上で淺井五葉(當時了 のが主催で川柳會を閉くやうになつた(中 形式を整へてゐた(中略)舊日報柳壇のも あた。そして、<br />
> 六厘坊一派は早くも川柳 今の都新聞の 前身大阪新報柳壇を開いて なかつた(中略) 故人小島六厘坊はその頃 變つたが、根本に於ては狂旬の性根を忘れ 花樽」は左四氏によつて可なり句風傾向 左叫氏でまさしく武市南風氏であつた「浪 の東夷氏の東上さ共に、後任についたのが るき噂さしたが、その真疑は知らない。 當時の選者東夷氏は 或は佐藤紅綠氏であ 十句宛掲載されてゐた(中略)「浪花樽 7 0 Di

係したのは明治一十七年頃であることは僕 てゐなかつたいで、路郎君が川柳を作りさう が十歳の頃には大阪にはまだ川柳が 「忘れ得の事ごも」が異なりこすれば、路郎氏 な時代のことは僕の知らないことだが、君の よりも君がよく知つてゐることである。川柳 な筈がないではないか、又路郎君が川柳に関 さ書いてゐるのでも明らかではないか、こん 復興し

> て此際猛省を促す。 あここは君の人格を下げるもので あるこし 僕は君の將來を思ふこあんな文章を 發表す ふほど君のここが心にかいつて仕方がない。 せ思はざるを得ないのである。さう思へば思 たこれを見ても 近來の君はごうかしてゐる のほかはない、昔の君はこんな男ではなかつ 坊氏からも大先輩に當るわけだ。呵々一さは ないこしてみれば、路郎君は久良岐翁や劍花 ば、三は二の誤植であるここは誰が見ても首 雑誌第二卷四月號の戸籍調べを見ても「明治 故意にいやがらせた 書かれたものさ解する 肯出來るこさではないか然るに「若しそうで 三十七年の晩春」さあるではないか、さすれ

であるさして涙を以てそれを拒絕し、多くの 後の路郎君を責めた時に、普通の人間なら一 郎君はその要求は社の方針さ相容れぬ も二もなくその要求を容れたであらうが、路 連中が路郎君の病中に或要求を持ち出し、病 れる松は、馬行、刀三、炭豆、美の作君 けて川柳雑誌の爲めに働いて來たミ 称せら 富んでゐる人であるならば、多年路郎君を助 知つてゐる筈である、若し路郎君が妥協性に か無い人かぐらいは君の方が僕よ りょよく 古い友人の君は、路郎君が妥協性のある人 さいふ

п

一豫約募集

幕僚を失つて 了つたではないか。斯くまで るを得ない。 斷定する君の無暴さ勇氣には 全く驚ろかざ する重大問題を軽々にしかも 敷行をもつて にしてゐる。 でゐない。斷言するのか。君さ全然立場を異 的なのか、過去の句ミ比較してごうして進ん は何事だ、路郎君の前記の句の何處が非藝術 味するではないか、こんなこさを君が書くさ りも少しも の路郎君の句が いふ意味に解してもよい」ご云ふここは現在 さいふこさが不妥當であれば、澁滯、 をしてゐる さいふのか僕には解らない。又 社の主義方針に忠質な路郎君の 自己の藝術の路を失ふに到つた。 進步して居ないさ云ふこさを意 こういふ 藝術味がない又以前の句よ 他人の藝術價値に関 何處が妥協 或は失ふ 停頓さ

路郎君の問題は別さしても 川柳雑誌の同

る

人を愚雜な連中さして、片附けられたこさは 外してゐるさころではないか、然るに我々な なものであることは、君が既に認めて常に口 代人の生活にびつたり合つた さも人生問題を尿び、社會問題を取扱つて現 き捨てならぬ一言である。 我々席を川柳雑誌に置くものにさつては、聞 我々の作品は他の柳誌ミ比較して、少なく 藝術味の豊か

> たくなる、假に君が我々を愚難さ見たのなら 輕本ではないか、お年の手前でも、少しは自 年不惑の君が、卵の殼を尻にくつつけてゐる は川柳家自からな、卑しめるものではないか る君が、川柳家な愚雑な連中で罵倒するここ ば、それは仕方がないさしても、川柳家であ 柳界に愚雜でない人間が、何人有るかさ言ひ 愚雑な連中では何事か、我々が愚雑ならば川 重して貰ひたいものである。 雛つ子の云ふやうなこさな書くさは、餘りに

しい酒の味を笑ふ資格があるかさ 云ひたい 言つてくれてゐるからそれを 借りる事にす 君に對しての言葉は ドフトエーフスキイが ないかも知らないが、昭和時代の時代相だけ は確かに摑んでゐるのである、古い革蹇が新 較して、我々の作品は技巧の點では或は及ば (罪を罰の一節) 君の芭蕉や鬼賞の飜案に等しい、作品と比

でかさないから無駄口を、叩くのかも知れ り口敷が多過ぎる。無駄口を叩いてゐるか に一歩を踏み出す事だ、新しい獨自の言葉 だらう。人間が一番怖れてゐるのは、新た ら何も出來ないのだ、いや待てよ、 を吐く事だ……だがそれにしても 俺は餘 体人間つて奴は何を一番怖れ てゐるの 何もし

旬

發

### 大 朝

所 行 發 社 中 外 市 京 東 町

その上に重役賞興ま 重役になられば罪 當直は社長の電話匍 たアツト云はされ席上路郎主幹より 蝶、柳人、丸葉、柳狂、雞牛子、雪 月、鲇美、賀名芽、里十九、錄山、孤舟、正吉、文 秀郎、十紫、双虎、かほる、凡平、彩秋、眠聲、觀 風柳坊、秋風、三次、苔香瓏、突支坊、廻天堂、 耽、琴人、源坊、毒仙、翠川、久一、湘里、秋水、 郎、ひろし、革郎、素 會な開く多數の來會あり、盛會であつた。月二日午後七時から 日本橋俱樂部で本計 赤丹、松郎、二柳子 一々、嶺月、加香、迷亭、柳骨、道一、貴山、 題 はされて一 南天、史郎、曼平、松壽、翠峯、流 「川柳漫談」があつて湖 でチ 3 同哄笑散會した。 f 3 à 讓松 三柳子記 V 赤阿貴 選 丹形山庭

维川

F

重重役 一役の \*役 と言 自 ッにこる 用で を並 75 ベ給 5 7 重 一役氣に つる へ髭が vj 12 D: して 7 住あ 居居み È V) V] ず

と向ひ で 、天才の 合 女 1: 0 B てま がを取 かる 3 ひ風 は寄れ續なな交が 機みせ す U 3 萬よし か鮎幸悟二素孤錄嶺率止加雅以 ほ 物 る美泉耶子人舟山月峯吉香柳虎 同同 舟同 骨

初戀のあきれられてるばか初戀のこの内海を去 ら ん初戀の頃は厚司を着 て 居 見は 見はからひ別な女給がも 見はからひの裏仕立屋 喰べてから名を聞いて見る見 見はからひ後で値段 店員さ相 見はからひ案外 初初初 戀な語 戀い 戀の 戀の からひ用があつたら手 席題 見はからひ はつま 0 打つ真似たも 5 初 やうに初 談してる見 n i 15 先 3 (1) 1 は家か まって まじめに話 ばか 3 様 息 食へるなさ bi 眼戀 b な で V 秘 13 n p. 3 Ĺ を聞き 出 き引 か筆 B 旅 わがつて來 云 め 7 寫 へ風 か かりなり たん居 つた かる i 5 15 ימ T D. 去 3 けら を叩 直 糖 3 7: U E ぬ續合な居稼 か L NW n 3 ほ 袋 す IJ りり懸 € U V りけ IJ 3 同松同舟 同 迷 同幸同武素錄翠嶺翠彩貴十 同 久 選

于人山川月峯秋山紫壁

想初初

3

D:

からし

47

讀け震

十同

加

笑 瑯 虎

見受見さば取はま 見見見見見見見見見 口口口 (軸)見 ば ば はか は は II に生きっぱ出来 はからひ女將の見なぬではからひ後はひそ~ から からひ 乗換券を もてあそびからひ母に賴んで氣に入らず D. 50 50 50 てる時計に氣 らひこんなも つ席 からひ 3 ひ仲居はなれ 少し かき餅 f 氣を かれて女房も 度念 なる 派手な 0 用を置ふ 11 かり押 でにはがきたのむなり 付く見はから んかと箸を まする 用 が見 柄か 1: に顔で行き どって して か話 II 事 仕 つあ 臭れ 7 を云ひ か П さ云 5 買 來 引 さ來締 殘 4 居 3 £ 居る 5 見 互 iù 3 N N る vJ V) 3 僕る め 3 3. す ¥) 三苔 か同同 舟同松同 愚 孤同 になる

久 風 一 坊 白 同鮎 同 + 素源秋虚秋愚正 選 選 人坊風白水陀

口答へ夫の為 これ年頃は口答へ絶いぬ 女 日答へ絶いぬ 女 日答へ 祀 る 物 エ 言ひ勝つた 口片中口少父 答足學答しの 皮肉な なぐら ПП 聞き捨てに 舎へされて ・後に淋し とれ下駄へ降 この 前母の まけや 行 されて 6 する力さへ れる氣で云 た亭 t 0 からこつちへ かせて居る ならい お子 を覗い ある の敷減 0 4 主 V) 教 3: 母 供 前 き師 なく病 vj 親 i 方房 二言 t 干房 氣 あ 3 3 通 10 ٤ 6 てる だけ して った 6 0 洟 1= て ζ 夫 à 5 3 0 か t 惡 來 3 父 婦初を 3 た た口 口な口 2 0 口を 3 5 ・へで出 3 す 早い 4. П で出 7 ,, 年 は答 6 p. T 15 か答 答 云見返な なの五 答 た か 75 ^^ B 兵み n 3 3 V ¥] 3 3 V) 見 2

郎

錄嶺亂迷武樂 賀觀阿白双 苔 同 赤正ひ 史 同 柳那子人山月耽亭子 ろし 香 瑯 天

お大目母阪ざ

に馴

母さ

5:

S

#

繼子

らっち

ず

娘

0

П

7

ある日

凡同

U

0.

5

ほる

答落 t

i

のれたり

卷き П

帶へ

口口答答

ですまれ 女 房ですまれ 女 房

へもなつ

D

ツ 0 f

H

な答答

V) ~~ U

か同秋同孤同

風

~

一言ですま

赤

n

赤 足

言う

を跳

を育り

口加

To 4

T

言

美しいだけの 女 を 連 中之島 らば ご美人の 後 根 深 く 美 人 ほつそり ご美人の 後 亂耽、曲水、六· 散會したのは八時頃。 41 雜川 六月十日 水、革郎 (參會者)二 後五時句會を閉ちて祝賀宴を 2/ 誌 + までうつ y 北 レーで開く、出席者は、 午後二時から北濱二丁 題 、六齋、幸泉、愚陀、風柳坊、一舟、秋波、南天、赤丹、鈴、二柳子、萬よし、千代路、 濱 とり 安部 から北濱二丁 3 4 後 用 3 V 笑をが 千代路、 向 步ひつあ美 左 開き、 きぬけ V 開き、各自の上の二十一氏 天 稔、曼 伊 0 力 佐美、 美 阪 7 路 天陀泉里路

達就院時組置辯こ 曳職時計だ時解の 美手美人鏡人 肥るこさ 天人さは君かいなち天人女給砂糖を入り天人女給砂糖を入り 乗題 ・誇りな 粤 きに計 のはに 計の革に To 3 は D. 娘母母飨 を知らず美人は惚れてさは君かいなめる醉らへ自信の 顔 を 寫 さ 女房若 ひ 婦 れ ば 帰れ ば す少 仲居 は美 心 時 ٤ 計配 そう母 8 Ĺ な頃の人 みん たば 0 2 鳴ったの 75 特計の行 の美 かれ居 室氣か計目 0 T: 3 D' 人のが層 II り眺 愚痴 るの 似計 n Ŀ 氣事蒲 でけ見覺 4. 100 n 4 ふすを雨をがてからさい て遮陽 を 4. 7 II M 出て 3 銀 7 る T 7 2 下掛寢頂らば高はおりる戦れる さなり て時言ねてあらか二持Cゐ な忘 弱あ着革下掛寢頂 3 3 持じゐる なみ りれれ柳 る計ふる VJ uJ 3 千 二萬稔湘 代選柳よ 路 子 し 里 二柳 溪同 曲稔千 同革同 同亂同稔水赤秋千 赤萬伊 佐美舟水 代選 代 郎 子 里丹路 路 鏡丹波路

ご母何炭セ T 母の涙かり 希は付白 CV 11 25 母 75 次め かけの せで前て呼に 3 立光 るせ さ住 5 迫 6 事 3 1: 母にして水 つ變札ざの 5 5 2 き上げる 0 貧心が暮 みひ 母 て來 残る也來 付け 弱 たい 加 ゐれ上て 出向る 寄萬 かり か足 3 V) 3 る 3 3 V) 1 75 3 3 革六赤亂愚幸伊千美湘南風稔曲 佐代智 柳 耶齊丹耽陀泉美盜耶里天坊 水 二柳子 革萬よし 同亂 選 佐 陀平美

えんになり なり なな 75 南水伊稔千 代路

敷脱い敷烟島稿、

ツト

灰

IJ

ひに行くにもチ

V

水

でなら有

・早つる の四けこ 灰子

が本起者

合うすが

なな藝投

新同舟翠濁

五て藝

の前

り者げ互

々 峯 水

らか

より安く買つ

1: かて

相相二場場三

1:

3

V)

選

4

7

知つ

T

II

反

V)

か 3

1=

たおっタリ

に高讶

突いな

船る

水

き家 て

形形當形來

越酒か日

かが杭

4

3

船船り

家家

大阪より舟々、新水 零峯の三氏遠來 歡迎句を開く。半日の舟遊に詩脇を洗つて午後八時から何箋を手にした。終つて筈ケン土佐節時から何箋を手にした。終つて筈ケン土佐節に向ふものが無い。一番弱い新水氏は「本職に向ふものが無い。一番弱い新水氏は「本職に向ふものが無い。一番弱い新水氏は「本職に対した。 天家納家家家家ぶ形成形形形形 的 F 米 キ相兎相 中 テ 口塘乡場 ら船に船船船船家 月雜川を × グ 師角表 Ξ 屋頭 十誌 賣 ラのもだ 厄 日ム裸営けば り味せん形 六社柳 から 1: が 船を食び 3 が月三櫓がい味を 無升强 一度 2 事のい時日 知 通 通信嘘 置 7 で値も 3 支 0: 2 がす音燗 無がのよ す T たた 6 なりにい n 句 加 ちが V) 3 書 らかす相な 2 11 互 e it U. き V) すれる場 高 知 同舟翠新同あ 同 萬革同曼幸一溪 4 よし 女

郞

Ti.

先先先先先先實黑 生生生生驗板道 # がのへもたのへは お時映先先 11 間つ 烟 ~ 壁さして いば生て 草 郷地は生然の 屋 客に や数が持ついたもれ のすん 徒 f 起 を怒へ 3 7 ら暑 1: 借 V) 3 な逃れいさ V) 1= 75 n 靐 りげる豊 手 る來り 同 同同 獨同舟同 選 水

Ĺ

のの子る情線跳越げ 地球が なば 長ひ上がかったか 00 3 3 すげす な乞別の 別れ る互 りひれかれさる 同濁同同舟同翠同

選 笑耽美る坊博 狂狂狂狂狂狂狂狂狂狂 循狂氣 狂狂 狂狂も狂 八人匹 八人人人人人人人人へ人狂人人匹人 ののののののののがてののののが 狂 人の人 人に へはが兼者 み時眼間後蠅 ひ紅堤 娘態はあき 2 人な B 笑心一 つき 日素直は は 既 かさ なか 貝ごかに ò カガは 1: 11 思日 素直 75 筋目白 た 6 在 け既 で狂 5 n 3. 人立き金子人 吊は のばにナ てに適 面 B 目な か の日 殘間笑飯位歩笑る髭て限魚供無 31 B 事 向つ ひをい くふ長がゝ V 三中 加 を云 て明出食ななてい伸ゐなへ四な や拔云か VJ N V V] V) る橋 びる V) 惡源 か同馬同舟同

p. 眼鏡 皆 皆ん ら短 提大を狂な 5 な暫 かさ てく 類歸 0 うに云 かわ 3 はず 4 か U 12 ひ橋れり 3 同舟翠新愚 よ 源 城子峯平蝶耽し坊太舟美郎郎 選 々墨水階

0

米米倉買 五. さく 合ば Rを見上げ 気切に行く送 がに行く送 りもよりない。 けロ白共へ國 0 あへ 量から歸つて 水た米を茶で 八に書 お報 さんの 25 3 3 70 米旗 米の艶で米の 八米を茶碗の を不気 0 米屋へ しくもの 鮮げ ら毒米は 3 らず JE. T 不 きなが後母平は 米を混 3 道す II 乍を女 水に 親る ないお米を て とから 有に から 有に までの月な い落 ら洗房兒 3 升 云 米拾 時に 1: 3. 10 II ٨ する ごうしま 3 うて見 に痩なれ米 一有に 7 新ふ i 廻 れてき た浴 かし なか 泣 き聞 3 せ洗 い生難行 あ世て み良 减恙持說 n か る v りわやふ 3 3 3 3 か源凡新ほる坊平水 二角双幸廻天堂 同 同同松同同翠同同赤同鲇同亂 同 坊平水太竹 郎

行 標 仙 13 3 午す 後 0 鎣 ケ池 支 部 向 ある 哉 大阪

お一短氣氣出

氣短短戾

ン飲見觀

短短氣へとはない。

へ煙管つまるなりが線にかいりい飲んで歸るなりりたて知らぬなりがまがくいかられて知らぬなりがりたて知らぬなりがられて知らぬなりがられて知らぬなりがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられて知られるがられ

p.

江

米故肝

れず大鼓の

の音が飲みな

す搗

5'€

石蒼灌

鄉心

~0

73

0

F

たがり

かかつ席

へののて題

五 雜川

誌

社机

町

支部

句

(大阪) 4

月

干

夜 屋

合舟

- p. 時り より夏 路の 助主幹三笑氏・ 必氣分になつて・ 松 並 加 迎 六月三 3 句 會日

意 莪 お路 뫲 L 主 が幹 あ 0 0 お 1: 座 敷藝 術 加 排 1

永永永淋手 思池渡風朝槽 生き しきは 生 きの きは て 子 がもう 口題 世 永 つ噺 相 4. 3 生 がおん きし 3 揃 3. L 寸 1: は なじ たか 3 3 か明 一 悠笑 云云ふ 4 けれ 出 3 N 笑 同同寂 選

つて

まだか

き汗

事

石

段

高

ζ

か

の舟力除いの別の眼にみんな 智器に相の対 てた 漕ぐ 回巡 f よろこび 一 選 が か が きょうき が 程 に除 音だけで や割 加 75 船船 鲷 1) 舟取 あふ 頭に व 0: 7 笑 しな舟 舟 3 任 3 n 3 B 11 ス テリ ばか II す 3 掛 0 1 4 ים v) V) 3 海三郎舟静 笑 戀戀戀

> 0 00

足の様に

ないが、

等氣引

でか入

席に 3

見

い吠に

1

D

T

3

あ孝見

行 3

双源陽悟蒼赤翠白三彩雀狗 葉 喜 梧 子坊亭郎樓城峯蝶笑秋淚舟

3

3

1: か

b

टे

111

合

郎

3

な寢

か手を

夜

0:

(軸)喰ふだけの 無期徒 只生きる 生きて 生活に 生きる道俺 惱 鳥川 ましひこさも 樂に鳴ぐ日 六 ては 月 取柳 に居て金の前に追れる 俺に別只恩典を待に追れる 俺 顯 + 支雜 部誌 丈 Ė (0) 4 111 の明か 今日も の俺 生きてる 1= 柳 っは 流して二 幕 11 13 續 生 社 ñ 違 數骸 IT t 石 U ふなり のな生 49 出舌 3 鐵 V) < 鳥取 舌同穗 同 市 選 選報 洲 悬 水 民

に靜

7

かに裁判長

兄への

を申親

舟萩冷毒

12

から

まやな折來げ更

か

(軸)船に飛り

1

N

今

0

と暑さ

を拭

いて

V)

p.

日汗

雜川

塚支部

1/4

(神奈川

縣

より

3

盗汗なから二

飯を喰ふにも

7i 誌柳 月二

十六日

支部

=

テ

酒 井駒

人報

中村

操めて立場

ts

橋

12

て

儲

の音からず

洲民水波

舟遊び 日に

波

0

77.

0

ル石石段である 石段をなるに を登りためて 樹ができまする。 菓子を見 T はが つき か さ登っ た明きつ 0 to 3 親 B 7 E 0 見 淚 7 ツ 食 25 V) 駒城粹 選 人月狂

家

形

舟

舌

長

子 舟

阪 4

い見

it to 3 祝 n 上 3 3. 3 駒城粹 選 人月狂 月川狂枝月 日孝 行がは一番 行行行 0 6 II 0 生っつ 月 近近 社柳 橋 所所 + 1= 平振りで でんしん 夜 かんかさかれ 糸 D' H \* 屋 n 町 へ舟終夢の孝 11 句

雜川 六誌柳 塚支部 向 (神 奈川 縣

書いてゐる候補者の類然選:見て投票はきつこします?投票なす。 最高力なき 人 が 最高力なき 人 が 最高力なき人が最高 投票の結 すミ八百星云 民 = 8 テ 7 投 1. てくる 75. あ 駒酒 井駒 函 3 人報 選 月狂江太

犬猿の兄も死ご聞お隣が焼けてすと

3

3

いて來

輝に水水

香柳

川月

臓る

形

舟には

ラ橋

から

飛んだ

屋の

見舞

田

右

定

崎

# 席月

合い

D' [n]

2

女駈駈駈 (住)長距離 ロルで 中落落落 75 3,00 長にな 落 落 れば 客待で 1: 5: に席 部 3 II さ電報 と 4. 3 米 0 屋 題 知 4 長屋 らず つを落 0 道 のき 3 掘 4 らす巡査は 通 りそ知らない驛に入チョコンミ坐わらないを話し つ樂車支客 小ラ て店さ表 ら候補 大夫病 かこぶ 見の ソン 235 のへ て表か をす べ表ルへ を懐 學士 4 代 たあらず客 一行 コリラ 商さ 12 うで 疲 表へに開 看板 疲れてい ~ 加 闘途の格 さら 3 明で落 3 たさ だ聲聲け 見て つを心わ 11] 3 D. 5 男 けをがる て い足 いっか題る か 買わゆるち 500 て す降 τ す 風 入かあ表 b 入れず れ互 車ち ş. V] 光 呂 り押る 3 n りけ

同美城粹 知 坊月狂 同駒城美粹香 知 人月坊狂川 同 同駒粹 駒美 人 月 坊 太 狂 入知坊 知坊川 選 選 選 選 人狂月

水理ご男静車屈みのか 看看退看看ハ ょ 看看看 其 い賴苦町 其の使苦勞人だこを古勞人養理がたいだけ古勞人養理がたいだけはないななを値切けるかななな値切けるがないがける。 越 1 4 護護護 ま勞內席 9人であつた これ な足子だ題 婦婦の婦婦 肥 婦婦婦 兼小な 11 01: 題屋 甘 は 4> 言ふ 九 思 つもの音になる れ 通いなば子供は 婦さんへ かんご婦子 12 水 九 7 い看 | 婦長思へご 例 UT を供 める に暮ぬ II i 損 1: 3 水 押 苦 れ水のなな 7 苦 Ĺ 苦 らは T Ü 下上く T 來 喧水すぶ 5 て勞勞强 勞 あった 19 互れ居 ず來 職 重 る 來みげりる V) 비 白 同同よし 同二木文吉龍二吟虛 虚木文松吟 まし 選 源竹月郎白三

白三月郎女

İII

]1

源

(大)狂人の豊に (大)狂人の豊に (大)狂人の豊に (軸)貸浴」 新 新寢面 新 新兵への (地)雨 暗町浴湯行 つき脱宿の 衣の丈 氣さが 65 眼盘 ぐののじ し題 Ti. 足す題 を出るに合 日で新足 日が新足 おお 兵 B 自 まされこ 的迄見 衣へま 新版な狂人 て會狂 ٤ 夜階は浴浴 たる眼 めびかい 並 にたり 演壇眼は、新兵服の門除隊の門 ま狂へ んでが浴 迄の浴 ζ な碧 れ腹 さ微 狂人 衣步座衣混志衣 鷄濡 笑返 人 門 食笑 D. る つい固た 少し逃れてる 初 ~ 0 い貨の混貨 直 すな終 てな右 拭れ右な見す年會のなのの流 察衣 て浴女花浴な

水三月朗三竹女白

掛居衣客節衣り る事兵ひ色り町飯 りりあり禿團 47 B 

、軸)眼鏡拭ひてすつかり夏の暑な、(秀)胴輩に度のない眼鏡借りらなる

## る (大阪) 右大臣

H

月二十六日

愚

階

報

桃桃桃 太郎ちさ日にや へ並んだ の撃 0: 1 卷 りに飛び ゆる 街げ 揃れ嬉 た て消 2 3. 5 つかか 1 75 か 同同 p, にほる階 13 耽

帰猿の 肝療 酒を出されて 癪なけ 困に B (1 b: 3 弱網な 3 V) 同亂愚か

7

る

## 町 偶 (大阪)

六月五 B 夜 於舟 4 居 川合舟 4

出獄の足をさすること 出獄の見れの 姿 ふり出獄の見れの 姿 ふり出獄の見れの 姿 ふり出獄の見れの 姿 ふり出獄の見れの 姿 ふり出獄の見れの 変 ふり のいちごの色にはづ つび着ななら 持 1= V) 6 って か寒に 2 唯 か C 逢 へい 3 同翠同萩毒源流正松 磨仙坊星博耶

> 出出 獄獄のの 村端れ 直 か 5 犬川 がに つ添 ŧ CA 同鮎

# (尼崎市

究會 を續けて 名 和 更した上姫島支部の方々と共に 行きます。 報 研

共稼ぎ噂ほどに も儲か、共稼ぎまでしたのにご妻は、 共稼ぎしても 共稼ぎ女房も 事着の儘女 ぎやつばり儲け 少し 3 房 娘 れだけ い乗 け氣 つか ら稼愚 る ぎ痴口 血 知 知 夫 洋 白 助 夫 洋 ら ち り

### 11 0 3 革 (大阪) 郎

B

耽陷 3

初戀は棚落水瓜にさ、初戀はピールの泡のよ 小屋の後ろで寢たる日 四月二十一 初りかの泡 のように 1: b 似に 0 ありき た初消 機に ひ革春琴 る し郎女女

青 青 疊 机

杯

い歴

0

3.

即竹

雑巾の

£ 位

v)

のあ

置

朝定古

5

まい

1 ちぼけの大分帶がゆるん ちぼけの口笛ジャズになって來 Ŧi. ればル E 月二十九日 かほる居偶會 妹ルピー 1.7 5 の色もなつ 競 (大阪) 高橋かほ T かしく べる 3 3 D' 愚 愚 D' ほる階 ほる階

美

# 當てにしてもう半時間待つてやり

れころ 青疊子供叱る に 白いエプロ 醉ひざれの元氣財布をふつて 儲けたかして元氣よく誘い 体操の先生の 聲 ひ びこ父さんの歸り元氣に抱き 元氣よく走つて出たさ思ひ 不景氣に『氣 六月九 疊 7 箪 が元氣で年 B ~に掃 笥 ズッ なか氣 0 V たにがにか らだい を 置. D. ¥ 例 ご鳴 忘 か場 る ð 3 5 2 2 2 T 7 ζ (尼崎) 3 4 4 木同 報 選 蛙三水月女 Ξ

五五

あきらめるこさに 諦めてはさめば豆腐やはら

H

あきらめた事ご母親 信 ご て ゐ男らしい子のあきらめに泣かさむ

同松同吟同

女

それだけのものさあつさり あきらめの悪い男の

諦める しさ 何事もあきらめられる年に なり 悪筆に生れつきだこあきら

水月三竹

3

選

人形をあきらめかれてダダをこれ

### 六月 町 夜 於舟 偶 4 居 (大阪 III 合舟

4

い婧婧婧婧婧嫦娥っ 歴史さ 機曳は つそ 0) Di 去っ 眼に 4 畫 思普女 l 2 なり 1: 0 胃 ふにに 捨 雄 12 てら 交 病 3 V 15 チ 叉 to 3 ð. れた犬さ 电 忘心藏た氣 れ躍を紺が で D3 逢ぬれ建上變搖み 3 ¥) て布り 同刀舟毒京流製松 報 々仙郎星峯郎

七 海回 至 誠 ]1] 柳 (大阪)

越して

來た日に子

供には連が出

來

官舍青葉の

茂

おさこ

n

3

同 道 朝

畑

f

あ

3

元へ歸るんですさ越して

行

3 ş

平輪石

五靜

0

裏から裏へ越

L

7

fř

第二月 なよろこびを以て散會した。次回は七月九日 んでに提出した、句作上の質疑に對し約一時路郥先生から短冊を寄贈された。偷會員がて な顔振れで席題「海水浴」「冗談」。會員は川柳を物にせれば 止まぬ 會員各自も十分に會得する 一件に亘つて源ぐましい、程丁寧な説明があ 三味線」「引越」は路郎先生の選各天位 曜、雜吟五句以內鷄五句路郎 H 天下茶屋集會所に 田 於て 處があり非常 まわ 開催 の互選兼 先 3 生選。 4. ふ熱

三味線を器械 へに女房三味を彈かして見、一般 三 味 線 路 を器械の 方 味線丈けが友になり 6 やうに出す 4 安 ケー 篮 郎 白字土木 多 居石閩雨 子供等の彼素上 プ泳イぐ (天)引越 引越しにアンテナの竿殘さ 越して行く 官舍寄引越した家へ來給 地 人)引越して見ても借屋 0

のはほの層屋引

よしてがー

組

又恐ろし

4.

波

って

7:

12

海 0

つ水廣

宿替に子

供は額をさげさい

尋

n

同路

)引越し

の亦のびんへに子しの後へ男は尋れ

が産

Ti. 電樓

郎

れ來

τ

瓢

選は借

屋なり

り間

三落た

の籍さ

味

線

三の 寝てたのが三味線な 天三 地)都々逸。出了三味線はテレて 人〉法界量三 水味 小線を置 を忘れられたは三味が 糸 題 一味線に合ふのが未練る言言 切 r れて一座は 引 味の鳴る方見上 て兩手に受けて 味線もつて押されてる 越 50 なごを習ひ出 ì 酒 12 階 15 でそら立ち げて 丈 路 75 る 來 t ± ì 7 V) 3 i 路泰 瓢 朝 问 同 瓢 同 泰同貴五 即平樓陽 選 霞樓 25 山輪

母も出

て泳ぎ見て

ねる歌

訪 泳

0

丈

ij

で

2

同路

ス

1 (0)

> n る 3

を見れば島

n

せてて る人のあって

る觀

海流

胰

4

3

拔手の海

派手 も渡

75

そる事

形平

姿

II

6

3

Ĥ

雨

今日

0

日に

1

談

8

盲

4

2

輸坊井開形山風

選

題

海水浴 トにの から 浴 60 りません : 來 騷 る 3 3 3 五樂貴 五泰

蛙のに

拔手

分

選 輪居山輪平

別莊 Ŧi. 題

冗談 縁起でも 冗談の 其れで 冗談の 冗談 冗談 冗談も馘にするさ 死んだのかまだ冗談と思 冗談で 泣きそふに 冗談もたまに 冗談にして 冗談のやうに年 さ思い 誌 柳 いへ空恐る も其迄來 多い あり やうで一生 ねてまだ冗 事が 無 田 社會さ知らい ご矢張 い冗談 度 b 交はせ けさい V. t 先 n 邊 事 增 ずを聞か 談さ思 を言つ は から ば す 40 4) 支 る中 ふ口 氣に ん 世 腹 n て 7 3 3 め 3 が事 p. られ 和歌山 てれ たた 弘 为 行な出ぶ T > K) VJ 3 V) 3 3 V) 3 3 8 縣 貴泰阿多靜同

山平形聞人

なた豆の消にたか知らず浮見 來て 0 大 奥様も 公 釣 望 釣つて F から 見 T 出 3 3 3 茶丁左 胴 おい馬

左

馬

報



費ひたいものである。 費ひたいものである。 し、本社さしては敷迎するさこ し、本社さしては敷迎するさこ し、本社さしては敷迎するさこ るであるが、形だけの真似は意 あであるが、形だけの真似は意 あであるが、形だけの真似は意

△夏が來た、萬物生々の色を見る、太陽は一年中の活動期に入った、川柳界も輝やからい天地ではければならぬさ思ふ、避暑だの主贅澤なこさを言つてる時だの主贅澤なこさを言つてる時ではない、書譲なんかをして居られる時ではない、太陽さ共に活動をする時ではない、太陽さ共に活動をするだけの意氣を持ちたい。

△次號の「夏期特輯號」は内容を

掲載するつもりである。 水多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。 が多い、期待して頂いてよい。

に資ふさころが少なくな 雜誌の内容がよくなれば、 △北濱支部が生れた。 る作家であるから、 さにした、 今回新たに編輯同人に迎へるこ △松盛琴人、 兩氏は各々特色のあ 川合舟々の兩氏 今後の川 幹事は谷 V. 兩 加 氏 柳

急沿線甲陽園へ吟行をされた來△胂戸支部では六月十七日に阪さ思つてゐる。

村稔氏である、

僕も支部員の

人である、各位の指導で御援助

公和戸支音では天月十十日に防 会者が頗ぶる多く、近來稀に見 會者が頗ぶる多く、近來稀に見 るの盛會であつた。 人社友猪野燕柳氏は病氣靜養の 人社友猪野燕柳氏は病氣靜養の るのの極合であった。

△橋本二柳子氏は六月十九日高後よ御努力を顧ふ

△社及四本三笑氏は七月九日か△社及四本三笑氏は七月九日から金澤の郷里へ歸り途中各地のら金澤の郷里へ歸り途中各地のらの兩氏は阪急沿線清端神に於しの兩氏は阪急沿線清端神に於て清遊された。

△麻生主幹が選句された新古川神を漫画化した中央美術社發行柳を漫画人に中央美術社發行の漫画大観第五篇「滑稽文學漫画」は七月上旬に發刊される。
本社友花童子氏は此間初めてお子さんを儲けられて大喜びで居

△社友中野柳陽氏叉び富田嵩蹊 氏は過般來阪され本社を訪問さ

△陶山秀甫の三女千鶴子さんが御全快を祈る。

崎松郎氏が出張されるこ書いた△前號に尾崎の名蚊巣句會に塚

哀悼します。

六月二日永眠された、

謹

しんで

△ 本土 田午川友部でよ卯志「b」 されるさうである。 されるさうである。

△本社加古川支部では柳誌「めた新る。(革耶記)

## 移轉

都城市牟田町一丁目二二二 河野 春魚

東京府中新井村中新井一七一二大連市聖徳街一丁目六五中田・忠一

四〇 尾山夜半杖 大阪港區八雲町三丁目一、三 大阪港區八雲町三丁目木村方 長巳 籬楓 長日 籬楓

## 止誤

## 投稿規定

▼旬稿は各題 するこさの 所氏名な明記 紙に認め、 住

く楷書 書體はなるべ るこさの 雜誌原稿」さ 封筒に朱記す 川柳

れたしつ 締切は殿守さ

墓卵

瓶

▼各地會報は清 記のこさ。

用紙は牛紙又 に限る。 は同型の 羅紙

投稿其他につ き御問合はす 入のこさ。 べて返信料封

募

## 第五卷第 九號課 七月五日締

to

(各題十句以內) 明雨 選进

▼魚

釣

看護婦 安青 井砥 島原 ひ不 3二 濤春 し網

共選

第五卷第十 八月五日締切 號課題

各題十句以內) 田丘 H Ш 眠町 雨 學二 樓 魚 共選 選選

包 號

發

行

近作柳樽(廿旬迄) 各地柳增(會報) 古句質疑(三句迄) 蛭 麻 子 4: 省 路 一擔當 郎 選

章(評論研究吟行漫文)

所。廣宛。告 社o 務o の用件は下記川柳谷の一切へ編輯に関する件で 願 ひます 務○體

店書捌賣

信

二八拾拾拾 六八拾拾拾 拾拾 錢錢錢錢錢

ば御相談に應じます 御一報下さいますれ ましては本社へ直接 本 聴への 廣告に就き

定 (一年分) には定價の外に手敷料十錢を 申し受けます ▼御注文には 郵便を登立てますが御不在中でも頂ける様に顧ひます、 に前金切の印ある時は直に御送金な顧びます 御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事 何月號よりご御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は喜新併記して 實であります▼誌代受領は送本によつて御承知顧ひます▼送 賣簡年前金(特輯號共)臺閩云 不月特輯號 一部 金五 於 新春特輯號 一部 金五 於 新春特輯號 一部 金五 於 御 は送金は振替日座次阪七五〇五 一つ番 へお拂込みに 料告廣 ▼御希望により集金 なるのが

但集金解價

一个技器

香油

昭和三年 六 月廿五日印刷

七 月 日發行

昭和

年

金第 五一回卷 一第 日發行) 宋七號

編輯兼發行印刷人 大阪市 西成區千 -本通五 丁目七番地 郎

大阪市西成區千本通五丁目七番地 111 柳

**振替吹阪三一五** 四零

大阪市住吉區杭全 柳 雜 誌 振替大阪七五〇五〇番 社 車 務

町六〇三番地

Ш

(大阪) (石川縣小松)マコト屋 (東京仲見世) 大賣捌 玉森堂 サ ŋ ラヤ (神月) (京都)三宅 ・書房。 (明文堂 米田、 後藤 其他市內各書店) (瞬館)石椒

Ш

柳

雜

31:

PUD

社

關

仁 (丰 颐 Ш 天 頓 111 住 外 Ш 杉 柳 П 幹町幹區幹町幹並幹町幹隈幹郡幹北幹新 矢<sub>八</sub>德五龜 岩 贵柳路 楊六太一 北十庄諸 田丁井 ш8ш 右 花 大 童 ょ 臣 柳 子 路 馬 南 陽 源

輪 田 杀 金 燈 姬 高 小 松 和町大澤 外 阳 市 阪 淀 111 幹邊幹糸幹八幹急幹川幹本幹町幹町幹津 合目川三西海 **地田五澤** 島 F. 杏養眠 左 文 町 三內聲 子 馬 路

北 島 富 京 青 加 275 粤 濱大取鳥岡山都京森青川兵 泰神 支限 支取支口支都支森支庫 支來支 支根部市部市部縣部市部市部縣部川部 橋部縣 都 4 古 加 條 111 幹北幹町幹郡幹大幹町幹川幹塚幹 幹郡 事造事一事富事美事所事刑事相事令事一事一事一事一事 水町酒前高町森本 喜七 重野原 田町 宝島 田 H 村武 笑 血 綠 京 飯 敱 太 耶 洲 郎 Ш 彩 郎

赤小藤藤國長田田嘉片岡大池 井酒本 井卯村枝崎中中納岡本道澤 清不之 史柳香辰 直一弘樂 司木助作郎秀涯二純方平雄居

松安楊柳桑桑中中中中中土谷高東本畑 丘西井川島原島見澤野川 村橋重田田 町杏二洲文京鐵光濁柳隱 綠白一炭 二三南馬絲郎洲路水陽子馬稔郎鷗路車

五九

## 酒 清

白鶴を飲む同朋がなつかしい



滿洲へ積む白鶴の樽の數

離 津 攝 融 曾名合納嘉

があらうさ思ふ。つまらの事 らば決して損の無いこさがわ のやうであるが實行されたな は幾册かなロハで讀める利益 たならば幾册か求めるうちに 近に出た本の古本を求められ ことは容易ではない。たさへ が出るさ新刊を一々讀破する やうに公立社の棚から至極最 い譯である。 子にさつては、 されるのであるから我々讀書 した新らしい古本が時々提供 を買ふのは莫迦らしい事であ 古本が出れば全く新らしい本 必要がなくなる。極く綺麗な うなればわざく、新本な買い ころになれば、もう古本で至 新本を買つてもいよく、讀む 新らしい本が出てゐる。こ 殊に公立社の棚には断う 諸君も私さ同じ 誠にありがた

(路耶生)

高

價に申し 受 け ます。

御 通 知 次第早速 參上確實

迅 速 E 御 取 引 致 i £ す。

桃太郎の研究

金

田

晴

正

著

佯裝美本 定價 五十錢

我國民性にピッタリミ合つて居るかは斯書を見れば直ちに判明します 日本一の昔話桃太郎に關した著者多年の研究を發表されたものです、如何に 郵稅 二錢

大阪市南區日本橋南詰南入 話 南 五 六二 番

內 科 呼吸 胃腸

和

漢

學博士 長谷川。

南四一八八番長堀橋高島屋前

大阪

市

麻 生 路 郎 編 著 0 柴 谷 柴 舟 漫 畵 並 装 幀

漫畵三十二葉·四六版·美裝·函

壹

員

(送料拾錢

大阪市西成區千本通五の

七



を御利用願ひます。(葭乃) 5 よろこんであます。書店で 質に氣持の 發行所 直接御注文下さい。御送金はなる 本ださ 振替大阪五二五八五番 云は 賣切 れて れて あま ねまし 1 ので

1:

實 111 目概容內 柳 3 快に、而も不知不識の間 は 漫川 大 日 温柳 何 衆 月 累 ぞ 卵 は 2 0 の遊び 輝 共 4 12 の數萬言 を類題によりが が短評を加いる。 加して一般讀者 へ特 を聴 收文-て別 に の興趣性 初號 心者の参考に流に掲載されたな たるものに発誌しに 111 < を湧か よ 柳 9 柳家諸に 0 しそめの 3 資る 妙 LIII 諦 本 る者麻 かなもの | 選を 氏の力作になる住 書 を の一路郎氏がに 知 を繙 者麻 せ H 生路 短評を附

## づ出版

何名吟

郎

氏

h

0

うぬらなに切品 さ下文註御急至

### 6か中の譜新月七

劇 映 髙

鬼 面 黑

(入クツサ校二)





盚 阪 音 神 器 商 會

內

外

拾 錢

定

價

參